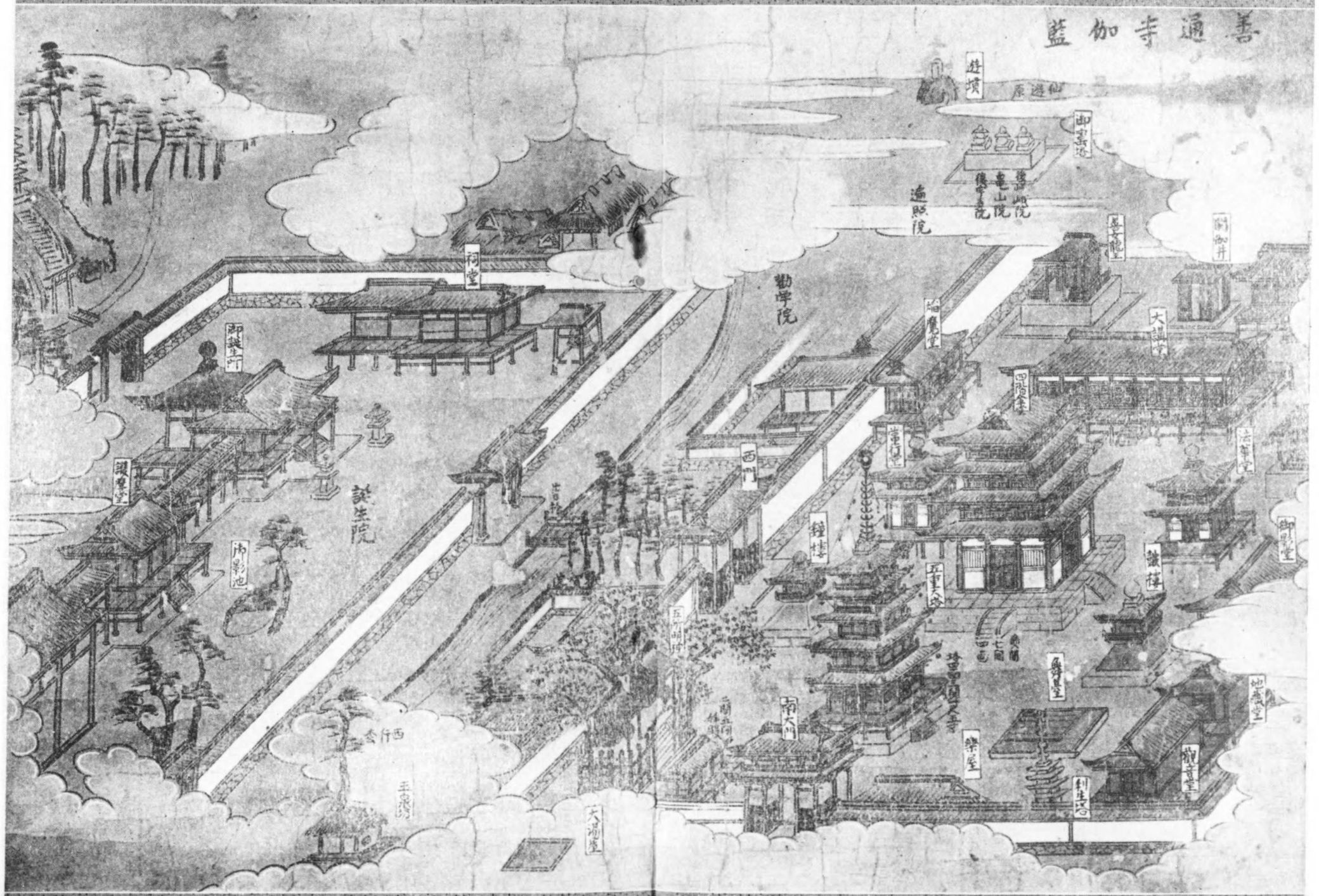
特233
803

大海主義

筆山
香色山

始

善通寺伽藍


遊墳
仙遊原
御書院
遍照院
勸學院
御影堂
誕生院
鐘楼
五重塔
大師堂
地蔵堂
観音堂
利生塔
大師堂
南大門
西門
五智如来
大日如来
西行念
王宮門

特233
803

法華義

題

大师灵光

大师正觀音

即事而真

三土忠造題

稚兒大師御尊像

自序

今歳、高祖大師一千百年の、御遠忌に相當するに際し、各種の著書に依つて、亦大阪朝日、毎日、其他全國の新聞紙、雜誌、映畫、ラヂオ、展覽會等に依つて大師の大業偉德は、詳細に究明せられ、高祖の面目が漸く全國民に理解せらるゝに立ち至つた。

「大師主義」、一篇は去る大正十二年初夏の執筆であるが、今回之れを大本山善通寺奉讃會の委囑に依り再刊するに際し、殆んど改作せんと志たのであるが、現下祖山の御遠忌大法會中であつて、之れを果たす餘暇なきを以て、多少の添削に止めたのである。

大師に對する余の見解が、今日愈々全國的に理解せられ、高祖の遺德が益光輝を發揚するを觀て、余は更に廣大なる靈格を鑽仰し、感謝の念に堪へぬのである。

昭和九、五、一五、

著者

大師主義目次

一、自　序……（一）
一、大師主義提唱……（八）
二、自由討究……（一一）
三、絶對包容……（一八）
四、文化尊重……（二元）
五、報恩感謝……（三元）
六、現世充足（上）……（四〇）
七、現世充足（下）……（四八）
八、神祕體現……（五六）
九、世界的靈格……（六四）
一〇、大師教の將來……（七五）

外　篇

一、遍照金剛尊……（一）

大師主義

和田性海著

一、大師主義の提唱

大師主義とは、勿論、弘法大師主義と云ふことであるが、敢て弘法の二字を略したのは大師と云へば弘法に限つて居るやうに、已に世間から了解せられて居るから、唱へ易きに從ふたのである。

大師とは佛陀十號の一であるから、法身如來主義であると、解する人があつても、亦敢て差支がない。

從來日蓮主義が最も早くから唱へられて居るが、日蓮上人は佛教各宗の祖師中、最も異彩のある方であるから、日蓮主義と取り立てゝ云ふのに、ふさはしい感じがする。弘法大師は日蓮

上人と正反對の色彩を帶びた方であつて、弘法と云ふ名を除きて、單に大師と唱ふる方が、早分りがする程特色があるのであるから、從來とても大師主義と云ふ名は、時々唱へられて居つたが、それが未だ徹底的に高唱せられぬのは、眞言宗の末徒達の、布教宣傳上の熱心が足らぬためであらうか。

近時、法然主義とか、親鸞主義とか、祖師の名を冠した主義の宣傳が、漸く流行する樣であるから、吾人が茲に大師主義を提唱すると、流行を追ふ者と見る人があるかも知れぬが、それは見る人の意見に任す外はない。

既往十數年、吾人が大師の教義を宣傳し來つた經驗に徵し、大師の靈格を中心として、其實驗せられたる事實を、統一的に布教することが、民衆を感化する上に最も必要なることを識つたのが、特に大師主義を提唱するに至つた所以であるから、以下其理由の三四を述べることにする。

（一）、大師の開かれたる眞言密教の教義が、高尙幽玄なる哲理に富んで居る點から、博士井上哲次郎氏などが、世界最高の哲學宗なりと、早くから世界に紹介したのに依り、眞言宗は大師が一代の心血を注いで、身心の上に體現せられた、實驗的宗教であるのを、單に哲學的な、理想的宗教として、取り扱ふ徒が少くない、併し是は世間の學者のみを攻める譯にゆかぬ、從來高野京都等に於ける、我宗内の教相學匠の多くは、宗學を机上に弄びて、當相卽道の談義のみに耽り、精神的遊戯を事とし來つて居るのは、果して大師の精神に契ふものであらうか世人をして眞言宗は哲學なりと誤解せしむるも、亦止むを得ぬ次第である。

（二）、教相と伴ふて、必ず實修せらるべき事相作法が、古來祕密として、唯師より資にのみ相傳へ、毫も世人に了解せられざりしに、一方實際的の行者は、多く自行のみに志し、山林に隱れて世に現はれず、他のために行はるゝ法要は、多くは檀信徒の先亡得脫と、家内安全等の祈禱とのみにて、一種の宗教的儀禮たるに止まり、毫も個人的信念に肉迫して、實生活の上に安慰と活力とを與ふる底の、深刻なる事實と成つて居らぬ。此所にも所謂事相は、個人的茶の湯式作法となるか、寺院内の恒例遊戯となり終つて、佛祖當面の眞劍的修養とは、太だしき距離を生じて居るのである。

（三）、亦密教々義の一面は、現世祈禱となつて、盛んに世の俗執を煽つて居る。成田の不動

生駒の聖天、信貴の毘沙門、乃至到る所の諸寺諸山に於て、眞言宗の繁昌は、所謂米相場の勝負とか、男女緣結びの中介とか云ふが如き、劣等なる慾望の手傳ひとして其生命を維持して居る。勿論、祈禱に依りて、人間慾を淨化することは、眞言宗の實義に相異ないが、折角大師が大有妙空の人生觀上より、婆羅門敎の事作法を轉化し、毒を變じて藥となし、煩惱卽菩提の眞理趣を發揮せられし、善巧方便をば却つて俗有の迷執に退墮し、原始婆羅門敎に還元せしめ、佛敎の名に依つて迷執の行を勸めて居るが如き、果して大師の本懷に契ふであらうか。

（四）、近時我大師が、各方面より盛んに研究せられ、其の文化的施設、社會的事業の、多くの貢獻が明瞭となるに伴ひ、如何なる人も日本文化の母として尊崇するやうになつた。然るに一部の短見者流は大師の偉大なる點を、此社會的事業の上にのみ認めて、大師の靈格の根源を成す、眞言密敎の開創と云ふことを、看過しやうとするのである。道路の言に聞けば、文部當局が國定敎科書中に、弘法を存し傳敎を除いたのは、弘法の社會的事功あるに比し、傳敎が宗敎以外に、社會的功勞がないからであると。傳敎大師が比叡山上に日本天台の敎風を樹立してから、日本佛敎界、乃ち我思想界に多大の波浪を生じ、法然の淨土宗、親鸞の眞宗、日蓮の法華宗等の各宗が、其敎簇の下から派生して、後世永く同胞民衆を救濟し、日本文明を發達せしめた、所有聖業が起つたのではないか。宗敎家を遇するに宗敎を以てすることを知らず、其餘業とも稱しつべき社會的事業を以てするが如き、如何に功利的思想に囚はれたればとて、一國の文敎を支配する者が、物の道理を辨へぬにも程こそあれ。亦以て如何に一世の風尙が、宗敎の眞義を理解せぬかを知るべきである。吾人は我大師の上にも其出世本懷の第一義は、何處迄も眞言密敎の開創であることを信じ、此根本靈覺から、所謂文化的運動の總てが、出で來れることを識つて居らねばならぬ。

（五）、大師の信仰が、高野山を中心として、四國八十八ヶ所、若しくば全國各所の遺跡に及び、其神祕的靈能を信ずる者は、他宗餘敎の徒を問はず、日に月に增加しつゝある。而して此大師信仰の通俗的宗敎意識は、從來眞言宗內に敎へ來れる、大師に對する敎相上の觀念とは、次第に其意義を變化しつゝある。眞言宗の學匠達が古來の文獻を調査して、大師を如何に取り扱ふべきかと評議して居る間に、活きたる大師信仰の意識は、遙に法身佛としての靈動を發揮しつゝあるのである。今や此活きたる宗敎意識に、大師の眞精神を吹き込むべき機會が切迫し

て居る。吾人は當に如何にして大師に依つて起つべきであらうか。

（六）、宗教を單に道德的の一面より寫象し、亦古代的嚴肅主義にのみ解して人間性を罪惡視し、極端なる戒律本位の見識を立てたる者に、曾て慈雲尊者あり。近く雲照律師あり。斯の如きは法然、親鸞の當時、已に一般的には打ち破られたる思想である。況んや近時人間本位、人道禮拜の觀念の旺逸せる時代には、人情味を沒却せる、戒律本位の宗教は、滅亡すべき運命にある。論より證據、現代日本の何處に戒律本位の宗教が存して居るか、存して居ると思ふ者があつたら幻影に過ぎない。而して大師は果して如何なる立場に居らるゝとするか。

想ふに宗教を哲學的にのみ解して、何時迄も四家大乘と、顯密の比較に耽つて居るのは、思想的喜劇である。宗教を倫理的にのみ寫象して、女人禁制の札を高くし、偏癖なる性格者を養成し、或は不自然なる行爲を激成せしむる如きは、人間性を解せざる悲劇である。宗教を神祕的に、亦は藝術的にのみ顯現せんとして、堂塔伽藍の建立や、古代的なる法會儀式のみに傾注するのは、餘りに現代人の生活を解せざる、閑人の徒事である。亦餘りに眼前の生活苦にのみ囚はれて、宗教を功利化せしめんとし、或は未來世の安慰のみを求めんとするは、依賴的安價の安心である。

要するに吾人の信ずべき宗教は、人世の總てゝあつて、最後のものでなくてはならぬ、智、情、意、圓滿にして、徹底せる人格者が、自己の心血を濺いで苦修錬行し、自己と全宇宙とを融合し去り、不死の生命に還源し來れる、最大の事實でなくてはならぬ。斯の意味に於て、吾人は我大師に其體現者を仰視し奉るのである。古往今來大師の靈格を外にして、何處にも此眞意義を完全に談るものは無い。

今や吾人は大師に還るべき時が來た。大師以來の所有教學や、事相の流派などは、一炬に付するも眞の修養に何等の不足は感ぜない。唯大師の直接の教に依つてのみ、不二の信仰に住し卽身に成佛することを得らるゝのである。世界の何れの宗教に於ても、開祖の時が常に信仰の活きて居る時で、後の註釋的人師に至れば、次第に理性にのみ囚はれて、信仰の血液が衰亡し行くのを見るのである。斯の如くにして吾人は今や正に大師に還らんとして、茲に大師主義を提唱するに立ち至つた。

而して吾人は自ら大師の眞精神なりと信ずる意義を、左の數項に分ちて、以下更に細說しよ

うと思ふ。

一、自由討究
二、絶對包容
三、文化尊重
四、報恩謝德
五、六、現世充足上下
七、神祕體現
八、世界的靈格
九、大師教の將來

二、自由討究

宗教を信仰し、若くば研究する態度に就て、普通は教祖の教義に對して、絶對に信順し、之を實行し、之を布演、祖述するのが、其教徒の本分とせられて居る。教祖の教義を、疑問し、

批評し、或は改正するのは、教祖に對する反逆であると見られて居る。勿論これは水平線内の善良なる信者にありては、一應無理のない談であるが、吾人の宗教心は、しかく平易にのみ取り扱はれぬことがある。

智的研究心の鋭利な者、情意的要求の猛烈な者にありては、時代々々に於て相違せる見解を起して、假令教祖の教訓なりとて、無條件に承認する能はざるに至ることがあるのである。殊に創造力に富みたる宗教的天才にありては、第一に教祖の教義其ものに、深き疑問を挾み、他教、他派の教義學問と比較研究して、漸く進めば益々深く、時としては教祖の宗教意識の根柢を突破し、より以上の境地を開顯し來ることがある。かくて教祖の宗教を離れて獨立の宗教となるか、分派して其一派となるか、こゝに宗教の進化が生ずる。

弘法大師は、空前絶後の宗教的天才であつたから、少年時代より、猛烈なる智的研究心に驅られ、周圍の所有人々を壓倒し、前代の總ての宗教を突破し、比較研究と、實修經驗の結果、古人未到の靈境を打開し、宇宙最高の金剛一乘教を開創せられたものである。

幼少時代に於て家學を受け、十五歳、出京して大學に入り、十八歳、佛教に志して近士と

なる迄、專ら儒教の教義を味ひ、並に道教を研究せしも、兩ながら滿足せず、「三教指歸」を著して、二十歳、和泉の槇尾山寺にて、勤操大德に就て出家する迄に、精神的の研究は、已に儒道の二教を超えて、佛教に歸する程の進歩を示し、肉體的修練に於ても、阿波の大瀧ヶ嶽、土州室戸の崎等に於て苦行練磨せられた。此間の行蹟を御遺告に左の如く記してある。

「名山絶嶽の處、嵯峨孤岸の原、遙然として獨り向ひ、淹留して苦行したりき。或は阿波の大瀧の嶽に上つて修行し、或は土佐の室生門の崎に於て、寂に暫く心に觀ぜし時、明星口に入り、虛空藏の光明照し來つて菩薩の威を顯はし、佛法の無二を現ず。厥の苦節は、嚴冬の深雪に、藤の衣を被て精進の道を顯はし、炎夏の極熱に、穀漿を絶つて朝暮に懺悔し、二十の歳に及ぶ。」

三教指歸の人生觀は、哲學思想としては、漸く大乘佛教の初門に達せしに過ぎざれども、實修經驗と相俟ち、全く物質的人世を一擲し去つて、神靈界に突入せし深刻なる求道的態度は、二十歳に達せざる青年として、驚愕すべき事實である。

二十歳以後、三十一歳の九月、入唐留學の勅宣を被るまでの大師の行蹟は、比較的文獻の徵すべきものが尠いが、二十二歳、東大寺の戒壇院にて具足戒を受けて名を空海と改め、二十三歳、久米寺の東塔中にて「大日經」を感得し、二十五歳、阿波大瀧寺を建立し、三十歳、入唐求法の大願を發されたと傳へて居るが、此間の精神的、肉體的の惡戰苦鬪の狀は、文獻に顯はれて居らぬだけ、それだけ深刻さが想像せられるのである。

此時機に、四國、中國、近畿の諸山嶽に登りて、大自然の中に鍊行せられしは云ふまでもなく、南都の諸高僧に就いて、律、法相、三論、華嚴の教旨を叩かれたれども、大師が徹底すべき道として、切角投歸せられた佛教も、比類なき天才の疑問を解くに足らなかつた。煩悶に繼ぐに煩悶を以てした消息は、左の文に依つても識ることが出來る。

「弟子空海、性薫我を勸めて、還源を思ひと爲す、徑路未だ知らず、岐に臨んで幾たびか泣く、精誠感ずるところ有て、此の祕門を得たり。」

卽ち、華、天兩一乘も、未だ迷界の歸趣を示さざりしに依つて、二十三歳の時佛前に祈誓して、

「吾れ佛法に從つて常に要を求むるに、三乘、五乘、十二部の經、心神に疑ひあつて、未だ

以て決と爲さず、唯願はくば三世十方の諸佛、我に不二を示し終へ。」

と、至心に祈れる時、夜に神人ありて告げて曰く、

「此に經王あり、名けて「大毘盧遮那經」と云ふ、大日本國、高市郡、久米道場の東塔の下にあり」

と、卽ち、此の經を感得して以後、千たび萬たび日夜に讀誦すれども、衆情滯り有つて全解することが出來ぬ。しかも南都北京　日本國の何處にも尋問するに人が無かつた。遂に入唐留學の志を起したのは、實に必死の要求であつたのである。

こゝに尤も注意すべきことは、大師求道の終始を通じて常に智識の滿足を得る研究的方法乃ち講論、翻經のみに依らず、直に實證體現すべく、宇宙の大靈に向うて、眞摯に祈願せられた敬虔なる宗教的態度である。從つて大師は常に宇宙大靈と感應して、神祕三昧に住せられて居た。入唐求法に就ても、左の勤操大德の、桓武天皇に捧げたる上奏文を見れば、已に如何に神祕的意義に包まれて居たかゞ理解る。

「右十四年登戒壇の僧空海、諸佛の指授を受けて、溫ぬる所の經、大和久米道場に在りて、善無畏三藏の游涉に得たり。彼の三藏識して曰く、「此地大機未だ熟せず、經を止めて時を待つ。末世に弘法利生の菩薩あつて、來つて此經を恢めん」と、然るに空海、諸佛の指授を受けて、古聖人の讖文に當る。今國家の此靈を產するは、恐らくは天下太平の豫標か。伏て乞ふ、陛下勅して求法に擢んで、玄珠を異邦に攻めしめ、大厦の材を致さしめ給へ。」

以て師たる勤操大德が、大師を如何に敬仰せしかを知り得ると共に、大師の求法的態度の、如何に熱烈にして神嚴なりしかを知るべきである。

渡唐往復海上の風波の荒かつたのは、當時の狀態として止むを得ぬが、延曆二十四年、大師三十二歲、入唐第二年の初夏、密宗第七祖、靑龍寺の惠果阿闍梨の室に投ずるや、

「吾れ汝を待つこと久し矣、我が命既に盡きなんとす、早く灌頂の壇に入るべし。」

との敎へを受け、續いて義明供奉以外の人には曾て授けざりし、金剛界、胎藏界兩部の大法を梵漢差ふことなく、瀉瓶の如く全部傳へられたる、未曾有の不可思議事件は、例令好漢、好漢を識るとは云へ、人間界に想像の出來ぬことである。況んや大師が親ら、惠果和尙の碑文に書かれた。

「弟子空海、桑梓を顧みれば東海の東、行李を想へば難中の難なり、波濤萬々雲山幾千ぞ、來ること我が力に非ず、歸らんこと我が志に非ず、我を招くに鈎を以てし、我を引くに索を以てす、、船を泛べし朝には數々異相を示し、帆を歸す夕には縷しく宿緣を說く。和尙掩色の夜、境界の中に於て、弟子に告げて曰く「汝未だ知らずや、吾と汝と宿契の深きことを、多生の中に相共に誓願して密藏を弘演す、彼此代る〳〵師資と爲ること、只一兩度のみに非ず、是の故に汝が遠涉を勸めて我が深法を授く、受法云に畢んぬ吾が願ひ足れり、汝は西土にして我が足に接す、吾は東生して汝が室に入らん、久しく遲留すること莫れ、吾れ前に在つて去らん」と、竊に此の言を顧るに、進退我能くする所に非ず、去留我が師に隨ふなり。」

と云ふ意義を味へば、大師が既に悉地を成就し、愈〻日本眞言宗の開祖として、絕大の抱負と徹底的見地とを、把持せられたことを識り得るのである。

大同元年歸朝、同二年勅を受けて、新密敎宣傳の敎旗は、三十四歲の靑年僧に依つて、始めて平安の都に高く飜へされた。かくて眞言密敎の、從來の佛敎諸宗と異る點を宣明すべく、撰述せられたのが、「辨顯密二敎論」(橫の判敎と云ふ)二卷と、「秘密曼荼羅十住心論」(竪の判敎と云ふ)十卷とである。

二敎論は、法相、三論、天台、華嚴の四宗を橫に並べて一々眞言宗と比較し、前四宗は何れも顯露なる淺敎にて、眞言宗のみ最極秘密の深敎なりと、顯密二種の理を解說せしものであつて、論鋒峻烈を極めて居る。以て大師が如何に一切藏經を讀破せられたかを知るべきである。

十住心論と、並に後に著された「秘藏寶鑰」とは、人類宗敎心の向上發展する階段を十種に區分し、第一異生羝羊心と云ふ、劣等な獸的心品より、人間、天上、聲聞、緣覺、更に權大乘敎なる、法相、三論、實大乘敎なる、天台、華嚴と次第に向上の心品を說き、最後に秘密莊嚴心なる眞言密敎に及ぶ。實に橫統一切敎と云ふべき博大無上の敎判である。

今此の十住心の說相を觀るに、大日經住心品の、心續生段を廣說せられたものであるが、大師の靈犀なる眼吼が、如何に經意を貫いて、雲表に翔つて居るかゝ窺はれる。

亦大師が善無畏三藏が、大日經の疏に、阿字本不生義を立說し、空門的に說かれたる密敎を、「卽身成佛義」に於て、六大體大說を主張し、法性の源底に地、水、火、風、空、識の六大

が法爾に存在して居ると云ふ、大有相論を立てられた點は、無相眞如を談ずる顯教諸宗に對して、最後の留めを刺したるものなると共に、前人未發の達見と云はねばならぬ。斯の如き創造的天才は、大師の獨特の壇場とも云ふべきか、しかも是れ一に其の自由討究、前佛後聖何者にも障へられぬ見識から出で來つたものである。

今や我邦に於ける佛耶兩教徒を比較するに、其數に於て耶は佛の十が一にも當らぬが、教育的、社會的、藝術的、各種の事業に於て、却つて佛教徒を凌いで居るのは、果して何に原因するか。是れ佛教徒の多くは、無理解ながら習慣的に教徒となり居るに反して、耶蘇教徒は淺薄なりと雖も、理解して信徒となり居るが故に、其團體が充實して居るからである。されば今後は、無理解なる教徒の多きことは、決して教團の勢力でないことを知り、少數でも信仰を自由に求むる者を以て、教團を組織せねばならぬ。

道友眞井覺深師、吾人が主幹せる雜誌、「慈悲の光」に、信仰の意義を語りて「從來の佛教徒には、家としての信者はあるが、人としての信者がない、是れが實生活と佛教とが一致せぬ原因である。」と、蓋し近來の名言である。只在家に人としての信者がないのみではない。今や我宗の僧侶や學匠中に、宗としての僧侶や、宗としての學匠はあつても、人としての僧侶や、人としての學匠が何人あるであらうか。宗としての學問が如何ばかり細密に、煩鎖になつても、それは人を救ふ宗教としては、全く生命の無いものではなからうか。何故に我宗には、現代を指導し得る一文明批評家すらも出でぬのであるか。當相卽道が三重、四重の秘釋に埋もれて泣いて居りはせぬか。大師の求道の態度に照して僧俗共に一大反省すべきではあるまいか。

三、絕對包容

大師の御性格は、八面玲瓏、天衣無縫、絕對包容、實に圓滿なる御仁であつた。故に一代を通じて、他と抗爭せられたことが殆んど無かつた。

或る傳說には西寺の守敏僧都が、大師に反對せられたことが傳へられてあるが、これは芝居氣のある作者の造りごとである。俗情から考へると、月に村雲花に嵐、多少缺けた所のある方が趣がある。釋尊にすら提婆達多と云ふ反對者があつた。法然、親鸞の如き、無抵抗主義の方々も、法門の爲めに遠國邊土に流罪に處せられた。日蓮上人には龍の口の法難、佐渡の遠島

などの辛苦艱難があつたから、末代の弟子信徒が、其の遺志に感激して蹶起するのである。然るに大師の如く、名門より出でゝ、名師に推薦せられ、入唐二年にして歸朝すれば、直に天皇の叡信を辱ふし、三公九卿、皆拜跪して歸依したと云ふのでは、餘りに容易に事業が出來過ぎるから他の同情を買ひ難い。であるから守敏ぐらいの配役がある方が宜からうと云ふ、苦勞人が出來たのである。

當時大師の先輩である、比叡山の最澄上人は、早くから桓武天皇の叡信を蒙り、新都要勝の地に據つて、新佛敎を開創せられたのであつたが、天性堅忍孤峭にして、奈良の各宗徒と相容れず、一代を通じて論難攻擊に終つたのである、故に畢世の本願であつた、大乘圓頓戒壇の如きも、南都方面より種々の故障があつて、入寂せられた後に至つて漸く勅許せられたのである。

大師は之に反して、三論の名匠、勤操大德を師とせられた關係もあらうが、奈良の學匠からも畏敬せられ、後には東大寺の別當として、南都各宗を管領せらるゝに至つた。亦最澄上人とは、兄弟師資の狀態にて、相扶けて舊佛敎を改革し、新敎の鼓吹に努められ、實に十方無敵の狀態であつた。

東洋大學長、境野黃洋氏は、曾て大師を目して、貴族主義の人なりと云ふて居るが、それは大師の環境を理解せず、大師の事蹟を調査せず、大師の精神に同情せぬ、偏見よりする放言と云ふべきである。

大師が名門に出でたるに係はらず、亦學者として榮達すべき推挽者ありしに拘らず、三十一歲にして入唐するまでは、一切權貴に近寄らず、專心に不二法を求め、苦修練行して止まざりし態度を見よ。

一度び萬乘の叡信に依り、立敎開宗して以來、聖旨に依りて屢宮中に參殿せられしも、嵯峨帝の友情篤き待遇に背かれ、暇すらあれば高雄に、高野に幽棲修禪することを喜ばれた心情を、果して貴族的生活を好まれたと云ひ得るか。「少僧都を辭された表」の

「空海、弱冠より知命に及ぶまで、山藪を宅と爲し、禪默を心と爲す、人事を經まず、煩碎に耐えず、然るに今斗筲の才を以て、謬つて法綱に處り、鉛刀の質を以て、明りに僧統に居らば、必ず手を傷くるの謗りを致して、遂に二利の益無からん。豈若かんや、香を燒き、佛を念じて、形を一室に老ひ、華を散じ、經を講じて、心を三密に運らし、國恩を枯木に報じ、

冒地を死灰に求めんには」の文意に、大師の精神は充分に現はれて居る。況んや「綜藝種智院」の建設は當時、藤原氏、橘氏清原氏、等の子弟のみが學に從ふことを得て、一般平民の子弟が、志しあれども學ぶことを能はざるに憤慨して資力なき一介の貧僧が、永く維持し得るや否やをも顧みるに遑なく、赤手空拳、萬世に普通教育の要を叫ばれた、平民傳道の血染の旗ではないか。

由來天台、眞言兩宗が、永く公卿乃ち貴族の宗教となつたのは、時代の關係に外ならぬ。大師の末資が平安鎌倉時代を通じて、祈禱、講經のため、宮中や、貴族間に關係多かりしことや宇多法皇の御室仁和寺に於ける、其他大覺寺、三寶院、勸修寺、隨心院、泉涌寺等が、歴代金枝玉葉の門跡地として遺れるは、全く時代環境の然らしむる所であつて、實に眞言宗と皇室との大事因緣である。吾人の誠心を以つて云へば、大師の如き偉人の出でざる現時の、御皇室や、各貴族と佛教との關係は、啻に佛教の不幸のみではない。思へば暗涙に咽ばざるを得ぬのである。

臣子として皇室に對し、國民として國體に對する大師の信念と、人類愛の思想より、同胞救濟を念とせられし、大師の平民主義とは、決して混同すべきものでない。入つては座禪觀法、自修自覺に餘念なく、出でゝは一笠天下を覆ひ、一杖乾坤を貫き、七寸の草鞋能く天下の山野を跋渉し、到る所平民の友として鰥寡孤獨を慰められ、流風永く四國八十八ヶ所に遺り、今や「南無大師遍照」の聲は、平民佛教の旗幟として、日夜に末代の赤子を救濟しつゝある。我大師は其の行蹟に於て其の精神に於て、其の影響に於て、決して貴族主義と認め得べきでない。要するに大師は、貴族とか、平民とか云ふことに囚はれずして、全人類救濟の目的の下に、最善の努力を拂はれたのである。

大師は眞言行人の護持すべき、秘密十重禁戒の中に於て、

(イ)一切の法を、慳悋すべからず。

(ロ)三乘の教典を、毀謗すべからず。

と、訓へられて居る。されば吾人眞言宗徒は、人の來り問ふ者あれば、一切の法義を宣傳すべきと共に、他宗他派の教義を惡罵、讒謗することは、決して出來ぬのである。大師のかゝる包容的、平和的態度に比較して、正反對の排他的、破壞的態度を採つたのは日蓮上人である。日

蓮宗には四ケの格言なるものを掲げて、

「眞言亡國、禪天魔、念佛無間、律國賊、」

と公唱し、「一天四海、皆歸妙法」をモットウとして、孟子の所謂「揚墨を排する者は、皆聖人の徒なり」と云ふ態度で、假令血を見るまでも、他を倒さずんば自ら顯はれずとなし、擧宗鬪爭氣分で滿ち充ちて居る。

由來佛敎には、攝取門と、折伏門との二門があつて、地藏菩薩や、阿彌陀如來の如き、大慈大悲の面影を以て、猶且つ濟度し難き難化の衆生に對しては、不動明王や、大元帥明王の如き破折的、壓伏的手段を以て、方便引進することが說かれて居る。

曾て我が布敎師會で、布敎師の傳道する態度を語り合ふた際に、佐伯惠眼僧正は、布敎師たる者は、常に人に對する時に面目柔和に、言語愉快に、何處までも平和謙遜であらねばならぬと說かれたに對し、共に座に居られた和田大圓僧正は、已に佛さまにも不動尊の如きが在るではないか、布敎師なればとて降魔折伏の利劍は携ふべきである。と、齒を嚙み眼を怒らして申された時、吾人は兩者の性格を對照して、そゞろに苦笑を禁じ得なかつたことがある。

攝取、折伏は衆生化益の二方面には相違ないが、曼荼羅を拜しても、敎令輪身は第二段であつて、佛部の諸尊は、皆大慈大悲、相貌圓滿のお方である、儒家にも能く王道、覇道と云ひ、王者の天下を治むるは仁政に依るとして居る。干戈兵力を用ゆるに至るは、國際間でも萬止むなきに依るので、武と云ふ字は「戈を止む」と書き、兵を鍊るは戈を用ひざるに至るを目的とするのが、兵法の極意である。されば劍を採つて惡罵するのは、矢張り一時の權道であつて、不完全なる人世では、急に之を廢することは出來まいが、之を以て布敎宣傳の公道とすることは出來ぬ。

絕對的に人を愛すると云ふことは、聖人でない限り、なか〳〵出來ることでない。已に敵を愛することが出來ぬ以上は、愛するが故に敵を打擲すると云ふことは、猶更出來ぬことである理性に富まずして、信仰心の厚き宗敎信者は、信ずるの餘り偏狹に陷り易く、常識を失ふ場合すらある。從來佛敎各宗が兎角に一致團結し難いのも、原因は此點に存するのである。甚だしきは同一宗內で、黨を樹て異を爭ふが如き、世に之を「坊主根性、尼僧根性」と云ふて居る。日蓮宗の僧俗が、社交的の事柄にまで、宗派根性を發揮して、同一國民間の調和を缺いで、宗祖

の精神に契ふて居ると考ふるが如き、流弊も恐るべきものである。

敵を愛せよと云ふ語を、標語として居る基督教徒が、異教徒に對して、却つて偏狹の觀念を持ち、父子兄弟、親戚朋友の交際にも支障が起るやうなことを、往々にして見受くるのは、宗教信仰は却つて人道までも破壞するに至る。假令信仰は一致せざるまでも、交際しつゝある間に、何時か自己の信仰に引入るゝ觀念の下で、人類愛を損せず、人道を全うするのが、現代人として、特に各教各宗混在せる日本の社會では、最も大切なる常識的態度ではあるまいか。

大師の信仰的態度は、前章に述べたる如く、尤も眞摯を極め、亦た其の修養方法は、實に神祕的であつたと同時に、大師の人類愛として情的方面は、佛陀としての覺醒から一切人類を救濟すべく、

「虛空盡き、衆生盡き、涅槃盡きなば、我願も盡きなん」

と曰はれし程、崇高なる聖愛に滿ちて居るのであるが、人として、師に對し父母に對し、子弟に對する人情味は、亦左記の文章に依つて見るべきである。

青龍和尙に衲袈裟を獻ずる狀

「空海、生緣は海外、時は是れ佛後なり、常に歎くらくは、迷霧冥氣として、惠日見難きことを、（中略）、三密を一法に朗かにし、十地を一生に究むるが如きに至つては、空しく英響を聞いて、未だ其人を見ず。伏して惟れば和尙三明圓かにして、萬行足れり、（中略）謂ひつべし三身の一身、千佛の一佛なり空海幸に洒掃に則つて、甘露に沐することを得たり、悲喜分に非ず、身を粉にするも何ぞ答へん、鴻恩に報ぜんと欲するに一の珍奇無し、唯だ麤衲の袈裟と、雜寶の手鑑のみ有り、以て丹誠を表す、代して願はくば慈悲して領を垂れ給へ。」

右は、大師が兩部大灌頂を受たる後、恩師惠果阿闍梨に對し、袈裟と手鑑とを獻じて、謝恩の萬一を表したる時の書狀であつて、以て慇懃の誠を窺ふべきである。

亡弟智泉の墜嶺文

「念へば亡き我法化、金剛の子智泉は、俗家には我を舅と云ひ、道に入つては卽ち長子なり孝心あつて我に事うること、今に二紀なり、恭敬法を禀け、兩部遺すこと無し、（中略）影の如くに離れず、股肱の如くに相從ふ、吾れ飢れば汝も亦飢え、吾れ樂めば汝も亦樂む、謂ゆる孔門の回愚、釋家の慶賢汝卽ち之に當れり、冀ふ所は百年の遺輪を轉じて、三密を長夜

に驚かさんことを、豈圖んや、棺槨を吾が車に請ひ、有慟を吾が懐に成さしめんとは、哀い哉、哀い哉、覺りの朝には夢虎無く、悟の日には幻象無しと云ふと雖も、然れども猶夢夜の別れ、不覺の涙に忍びず、巨壑半は渡つて片機忽ちに折れ大虚未だ凌がざるに一朔午に摧く、哀い哉、哀い哉。

是れ、大師の姉君の長男であり、大師の弟子中の長子であつた、智泉法師の死を悲まれたるもので、實に切々の情を極めて居る。

尚大師が母君を晩年に至り、高野山麓の慈尊院に迎へて、朝夕定省せられた孝道に至つては實に末代までの美談である。亦大師が其門下生に對して、慈愛篤かりしこと、其交友に對して親切を極められしことは、諸種の文献に徴して實に間然する所がない。我大師は斯くの如く人情美の體現者であつたのである。

大師が斯の如く、當時南都、北嶺の各宗派に對しても、皇室に對し、民衆に對し、近親に對し、且つ其教法宣布の方法に就いても、實に八面澄徹、月の如く玉の如き品性を顯現せられたのは、固より天性聖なるに依るのではあるが、其の達見せられたる、眞言最後の教峯に立ちて大覺圓滿の境地から人世に處して、行く所として宜しきを得るに到つたのである。

大師の提唱せられたる、十住心論の一端は、後章に至つて語る豫定であるが、其書中に示されたるが如く、世界に於ける各宗教を比較研究して、一たびは其の淺劣なる點を擧げて、之を排擊せられたが、最後第十の住心に到着して、亦振り返つて各宗教を觀察すると、各教は皆相當の理由ありて、存在の役目を果しつゝある。小兒は必ず成長するものであるが、大人は小兒なくしては存在せぬ。人世と云はず宇宙と云はず、到底一平等界のみに歸入することは出來ぬ。差別しながら其根底は、常に一如法性の理に統一せられて居る。かくて各宗の教義は皆存在の理由を備へ、桃紅李白、燦然として宇宙の美を爲して居る。是れ實に十界曼荼羅の當相である。秘密眼を開いて達觀するならば、何をか厭ひ、何をか求めん、法は皆其位に住して居る。

依つて大師は斯の如く獅子吼せられた。

「若し能く密號名字を明かにし、深く密厳秘藏を開けば、卽地獄、天堂、佛性、闡提、煩惱菩提、生死、涅槃、邊邪、中正、空有、偏圓、二乘、一乘、皆是れ自心佛の名字なり。焉れをか捨て、焉れをか取らん。」

是れ恰も、高山に上りて下界を眺むれば、山川草木、野末の小屋も、藪影の雪隱も、寸馬豆人、皆一大パノラマと爲り終りて、雄渾なる好風景を示すが如く、我秘密金剛乘を覺る者は、是非善惡を超越して、親しく密華嚴藏界を開見し得ることを示されたものである。夫れ斯の如き境地に立脚せる大師の行動が、常に偏見の雲を離れて、中天の秋月を觀るが如きは固より當然の至りである。

若夫れ大師の光輝ある成功が、何に由つて遂げ得られたかを知らんと思はゞ、前後十餘年、高嶽絶巓を攀ぢて苦修練行し、不二教を索ねて、煩悶血を吐きし時代を想ふべく、亦

「凡そ出家修道は、本と佛果を期す、更に輪王釋梵の家を要めず、豈に況んや人間少々の果報をや」

との、猛烈なる意氣を仰ぐべきである。更に法を重んぜらるゝ、强固なる意志は、傳教大師が理趣釋經を傳寫せんとて、借らんことを求められし時に、求道人の理趣を求むることは、其形に於てせずして、其精神を以てすべきことを說かれ、堂々たる大論文を贈られた。

「（前略）顯教一乘は公に非ざれば傳はらず、秘密佛教は唯だ我が誓ふ所なり。（中略）糞はゝは子ぢ、汝が智心を正しくし、汝が戲論を淨めて、理趣の句義と、密教の逗留とを聽け。（中略）子ぢ若し、三昧耶を越えずして、護ること身命の如くし、堅く四禁を持して、愛すること眼目に均くし、教への如く修觀し、坎に臨んで績有らば、卽ち五智の秘璽、踵を旋すに期しつべし。況んや乃ち誓中の明珠、誰か亦惜しまん、努力自愛せよ。」

平素は師友として尊敬措かざる最澄上人に對してすら、一たび眞言秘藏の談に移る時は、獅子王の威を示し、神嚴仰ぎ視る能はざるの慨がある。誰か云ふ大師に秋霜烈日の意氣を缺ぐと大師の圓滿なる靈格は、深藏淵默、實に測るべからざる根底より發して居るのである。

四、文化尊重

近來尙古思想の精神家に依りて、物質文明を否定し、現代文化を呪咀する聲を聞くのは、敢て珍しくないことである。

現代科學的文明は、蒸氣、電氣の力を以て、陸と海と空の總てを征服し、自然を變化し、天工を奪ふの感がある。顧みて人類生活の內容である、宗教、道德、經濟の各方面を考察すると、

現代人は人格の靈化と云ふことも、永遠の生命と云ふことも、亦宇宙の大靈に就いても、殆んど總てに盲目であつて、宗教的信念に就いては、全く零であると云ふても過言では無い。道德的精神も實に淺薄な考へのみで、人格の完成と云ふ如き、高尚な意義は認められず、唯物質的利己的、功利的な個人主義のみが盛んで、衣食住の上に、自己の慾望を恣にする觀念のみが發達して、從つて父母師友など、他のために盡す觀念は次第に減少し、家庭に於てすら、秩序を失ふと云ふ狀態に立ち至つて居る。

經濟的方面は、器械力の發達と、物資の增加は、前世紀に比し、非常に多くなつて居るのであるが、併も資本主義、自由競爭の結果は、貧富の懸隔甚だしく、少數なる資本家階級は最も幸福にして、前代未聞の榮華を極めて居るに反し、多數の無產階級者は、眼前に燦爛たる文化世界を示されつゝ、空しく其日のパンを求むるに忙殺されて、不平不滿の生活を餘儀なくさるゝ餘り、文化を憎惡し、社會を呪咀しつゝあるのである。

現代の如き社會組織の下では、深刻なる道德觀念なき者は、生活慾を滿足せしむるに急なるあまり、極端なる利己主義者となるのが當然の趨勢であり、已に道德的觀念無き已上、如何なる職業に從事する者も法律の禁制に觸れぬ限り、若くは法律を犯しつゝ、一時の利益を獲得して巨萬の富を造り、所謂成功者とならんとし、政治家、學者、宗教家等社會的精神的の代表者までが、時勢の風潮に卷込まれ、同胞社會のために、犧牲者となる觀念は消耗し終り、正業に從事することを嫌ふ無賴漢や、職業に失敗せる者や、失業者の群が、終に露骨に其の慾望を滿足せんとして、詐欺、橫領、盜賊、攫徒、賣淫、等を爲すに至り、其の實行する手段が、科學的に巧妙を極めて、文明の進步せる程度に隨ひ、善と惡とが正比例して、前代未聞の進步の狀態を示すに至るも、亦當然のことであつて、敢て怪しむを要せぬのである。

要するに現代文明の闇黑面は、虛欺の生活で固めて居ると云ひ得るのである、かゝる狀態を熟知する時は、如何にしてそれを改革すべきかと考察して、一面滔々たる物質的勢力が、寧ろ吾人の精神力を壓倒せる結果なりとし、此の物質的勢力を驅逐して、精神的原始時代に返さんと試みる、反現代的思想が起るのと、一面物質的經濟力の、平均を得れば、弊害を除去し得べしと考へて、資本家組織に反對し、社會主義、共產主義を唱ふる者とが出來るのである。

かくて道德、宗教を以て、社會を改正せんとする人々の中に、反現代的思想を持ち、文化の

復古を冀ふ者多きは、半面相當の理由がある。佛蘭西のルツソー、獨逸のショツペンハーエル、支那古代に於ける、莊子、老子などはかゝる傾向を帶びたる思想家である。

然るに我が大師は、斯の問題に對して、果して如何なる判斷を下さるゝであらうか。それが此章の主題である。

大師は已に顯教諸宗が、宇宙の大靈、萬物の本體を、唯一精神的眞如なりとするに反對して六大體大說を唱へ、地、水、火、風、空の物質的五大が、識大の外に本體として存在し、而も其靈的價値は、識大と同一にして、六大互に融卽し、一も分離することを得ずと、示されて居る邊りから考察すれば、蒸氣力が、陸上と海上とを短縮し、飛行機が空中を征服して、萬國を隣里と化し、電燈、電話、ラジオ等が、夜を晝となし、千里を一瞬に相通ぜしむる如き、物質の不可思議なる力は、將來種々の發明に依りて、尙ほ無盡の文化的事功を成就すべき原動力であるから、決して物質を精神以下に、靈能なきものと見る能はざることが分明すべく、從つて此の靈力を排斥して、人間社會を原始世界に反さんとするが如きは、畢竟不可能のことであるのみならず、宇宙の大靈に反逆する、不條理至極なる思想と云ふべきである。

大師が學校を建て、文字を製し、詩歌、文章、彫刻、書、繪畫に巧に、聲明、音樂を傳へ、佛堂建築の樣式を新にし、亦池を築き、橋を架し、當時の文物を變じて、永く日本文明の母と稱せらるゝ迄、社會的事業に貢獻せられし業績は、眞言の敎義上から、必然に生れ來りし結果であつて、我邦今日の文明を將來せる原因である。從つて今日の我文化的社會を以て、大師の本意に背いて居るものとは、決して考へられぬのである。

大師は、「秘藏寶鑰」中卷に、

「大山廣ければ、禽獸爭ひ歸し、藥毒雜り生ず。深海道大なれば、魚鼈集まり泳ぎ、龍鬼並び住む。（中略）孔子の門徒は其數三千なれども、達者は七十にして其餘は註せられず。釋尊の弟子は無數なりしが、六群天授善星比丘は、濫行極めて多し、如來の在せし日すら純善なることを得ず、何ぞ況んや末代の裔をや。」

と說かれて、世相の相對的にして、必ず利害相半ばし、長短雜處することを訓へられた、されば今日物質文明の進步せるに反し、精神的道德問題の閑却せらるゝのは、亦止むを得ざる現象と云はねばならぬ。併し悲觀論者の云ふが如く、古代人のみが道德精神が勝れて居つて、現代

人が非常に墮落して居ると云ふのは、蓋し正當な觀察ではない。古代人は個人的、家庭的道德には長所があり、亦大體は正直であつたが、現代人は社會的、國際的觀念に於て、古人より遙に進歩して居り、亦才智に於て大に勝れて居る。故に一面から云へば、今人の道德は必ずしも古人に劣つては居らぬのである。亦若し劣つて居るとすれば更に精神的改良を施すべきであつて、直に物質文明を咀ふが如きは、餘りに大體を識らぬものと云はねばならぬ。

大師は亦宇宙現象を說明して四種曼荼羅乃ち、四種の統一せる、純圓充實せる、妙相であると敎へられた。其四種曼荼羅とは、

(一)、大曼荼羅……全體の形相
(二)、三摩耶曼荼羅……特性の形相
(三)、法曼荼羅……名稱規則
(四)、羯磨曼荼羅……活動の形相

とである。卽ち茲に一軀の不動尊の像ありとせんに、其の全體の形相は大曼荼羅にて、劍を持ち索を携へしは、其の本誓特色を現じて居るので、三摩耶曼荼羅であり、大聖不動明王は其の名稱乃ち法曼荼羅にて、大忿怒、折伏の形相は、其の羯磨曼荼羅、乃ち活動相である。今是れを亦人間に例して見んに、商人としてのありのまゝの全體は、大曼荼羅、算盤を右にし商品と金錢とを左にせるは、三摩耶曼荼羅、商店員とか、小賣商人とか云ふ名稱は、法曼荼羅、有無相通じ、自他を利益せんとする姿は、羯磨曼荼羅である。

斯の如く、宇宙間の萬事萬物・有機物も、無機物も、何物も此の四種の形相の備はらざる物は無い。已に此の形相ある以上は、如何な物も法爾の意義なくして存在せる物はない。天は遙かに、地は曠く、山は高く、水は長く、柳は綠に花は紅に、自然界は實に無盡莊嚴の華藏世界である。此の塵々法々、皆純圓充實せる、有意義なる存在物なりとの思想は、宇宙を以て法爾に成就せる大藝術品と觀るものにて、茲に眞言宗の藝術主義が成立して居るのである。

已に宇宙は法爾に輪圓具足せる、藝術品なるが故に、其の眞趣を看取する時は、所謂極樂世界を、西方十萬億土の遠きに求むるの要なく、日月星辰、山川草木、森羅並列せる此の地球上に、絕大微妙なる一大美觀を看取し得るのである。若し能く此の眞趣を味ひ得るならば、吾人は日夜に諸佛の大遊戯せらるゝ藝術界に逍遙することを得て、無上の法悅に浴し、身心恍惚た

るエクスタシーに入ることを得、茲に藝術的神祕世界に、悟入し得るに至るので、是れ亦眞言密教の、一面の悟境と云ふべきである。

かく自然界をすら、藝術的に觀じ得るを以て、吾人が文化生活上に、演出する藝術に對しては、是れ亦法爾の妙趣が、緣起活現せる物として、至上の價値を認むるに至るのは、必然のことである。かくて大師の事蹟が、文章に、文字に、詩歌に、彫刻に、音樂に、佛畫に、到る所として可ならざるなく、實に神聖の妙技に達せる所以の偶然に非ざることを推想することが出來る。

眞言宗の諸法會議則、高野山に於ける諸法式の上には、有意にか無意識にか、最も多く此の藝術主義が現はれて居るのであるが、戒律的消極思想に累せられて、我が宗の各方面に此の意義が徹底的に發達して居らぬのは、洵に遺憾の至りと云はざるを得ぬ。

近來、新義派の青年僧侶が、宗教劇を始めたとか、宣眞女學校の生徒が、靈的歌劇を演ずるとか、高野山大師教會が、大師宣傳の活動寫眞を造つたとか、大分清新な方面が、開拓せられかけたのは、大師主義の一大進歩と目することが出來るが、此際佛畫界に於ても、新樣式を發揮する大手腕家が出づべく、亦諸法會議則の改正とともに、宗内の聲明音樂が、少くとも日本語で運ばるゝやうになり、殿堂建築の樣式も、東西兩洋の粹を集めて、大成する程の革命家が出現すべき時代が來ては居らぬであらうか。演劇。歌劇若しくは詠歌が、已に曼荼羅に歌菩薩、舞菩薩等が畫かれて居るに見ても、單に餘興的に存在するのみならず、祈禱法要と相並んで、神嚴なる意義を備へて、施行せらるゝまでに進むことは、大師の文化尊重主義の下には、當然要求せらるべきことではあるまいか。

現代物質的文明の一方面より人世を觀察し、所謂唯物史觀の立場から、經濟上の平等的分配すら行はるれば、文化生活の目的を達成し得べしと考へ、共產的社會を現出せんと努力する社會主義者と、何處までも現在の資本主義的社會の存在に執着する、國家主義の人々に對して、大師は果して如何なる態度を採らるゝであらうか。勿論大師の當時に於て現代の如き、經濟爲本の物質的社會が、現出することは、想像せらるべき限りでないから、明白なる文獻のなきことは當然であるから、大師の教義上より、眞精神を推究するに止まるのであるが、こゝに一言吾人の斷案だけを提示して、次へ移ることにする。

想ふに現今の如く、人類が貪、瞋、痴の三毒を基調とせる、利己的個人主義の上に組織せる社會は、經濟も、政治も、法律も、將た精神的なりと目せらるゝ、宗教、道德までが、全然惡差別に陷りて、餓鬼、修羅、畜生の三惡道を現出する外なく、資本主義も、亦社會主義も、畢竟は同一暗黑世界を惹き起すに過ぎずして、全く行き詰まれるものである。

吾人は已に精神と、物質とによつて、成立して居るものであるから、物質的進歩と、經濟的改造が、社會進化の一手段たることは、固より首肯せらるゝが、要するに佛陀の大慈悲の旨趣を體し、人類愛の精神に生き來るのでなくては所謂バンのみにては、到底社會の平和は來らぬのである。

亦吾人は分配の幸福以上に、創造の幸福を味はねば、卽ち飽滿を樂しむ以前に努力を好むのでなくては、眞に人世の至樂を得ることは、出來ぬことを識らねばならぬ。

亦一時的な、遊惰的の快樂は、決して吾人を向上せしむる所以でなくて、永遠の精神に生き犧牲的精神にて、社會に奉仕するのでなくては、至上の滿足を得ることが出來ぬのである。

斯の如くにして、現代人の多くが、道德を無視し、宗教を尊重せずして、低級なる物質觀、經濟本位の思想を以て、人類の文化を發達せしめ、所謂文化生活を營まんと企てゝ居るのは、要するに失敗に終るべき運命を持つて居り、例令一時彼等の志しは遂げられても、第二の行き詰まりに遭遇することは、火を視るよりも明かである。見よ現代は、科學的知識に因り、物産と機械力と、人間の出生とは、日に月に增加しながら、總ての人々は、不景氣と窮乏とに、困り切つて居るではないか。故に吾人は飽くまでも、大師の眞精神を體して、物質文明の進歩を計ると共に、物質的差別相を、平等的精神によつて融合せしむる、大慈大悲の精神に、總ての人類が覺醒し來るやうに努力せねばならぬのである。

五、報恩謝德

前章に述べたる如く、文化社會の建設には、人類愛の精神を基調とすべしとするに就いて、人類社會と吾人と、如何なる關係を有するかを究め、吾人は其の關係によつて、社會人類に對して如何なる態度を持すべきかを決定せねばならぬ。此の關係を佛敎にては、四恩を以て敎へ、

大師も亦人間の道德として、此の點を主張せられ、從つて吾人日常の生活を、感謝の態度を以て送らねばならぬと垂示せられた。大師は詳細に四恩を說いて、

「夫れ此の身は、虛空より化生せるにも非ず、大地より變現せるにも非ず。必ず四恩の德に資つて、此の五陰の體を保つ。謂はゆる四恩とは、一には父母二には國王、三には衆生、四には三寶なり。」

と總表し、次に父母の恩を語りて、

「我を生じ、我を育てし父母の恩は、天よりも高く地よりも厚し。身を粉にし命を損しても何の劫にか報ずることを得ん。」

と云ひ、國王の恩をば、

「父母我を生ずと雖も、若し國王なくんば、强弱相戰ひ、貴賤劫奪して、身命保ち難く、財寶何ぞ守らん。」

と、國王卽ち政治の權力に依つて、社會の平和の保たるゝことを示され。

「衆生我に何の恩德がある。吾は是れ無始より已來、四生六道の中に、父と爲り子となり、何の生をか受けざる、何の趣にか生ぜざる。」

と衆生の恩を敎へ、更に人我一體の理を高調して、

「若し惠眼を以て之れを觀れば、一切の衆生は皆是れ我が親なり。故に經に云はく一切の男子は是れ我が父、一切の女人は之れ我が母、一切の衆生は、皆是れ吾が二親と師君となり。このゆへに衆生の恩亦須らく報酬せざるべからず。」

と斷じ。更らに進んで、

「世間の父母は、唯だ一期の肉身を育ふ。國王の恩德も亦凡身を助くるのみ、若し能く生死の苦を斷じ、涅槃の樂を與ふるは、三寶の德なり。三寶とは、一には佛寶、二には法寶、三には僧寶なり。佛寶は一切智々を具して、衆生に正路を示す。法寶は難思の功德を具へて、能く持者をして世出世の樂を與へしむ。佛と法と、斯の如くの功德ありと雖も、若し僧寶無くんば、流通することを得ず。」

と、三寶の功德を誌し、最後に、

「夙に聞く、三世の如來、十方の菩薩は四恩の德を報じて悉く菩提を證す」

と證記して、末代の佛教徒は、必ず此の四恩を報謝すべきことを嚴訓せられて居る。

由來、報恩の思想は、佛教道徳の根本主義であつて、若し此の思想なくんば佛教道徳は全く破壞せらるべく、報恩の觀念によつて、始めて感謝の生活を送ることが出來る。日常感謝の念を以て、世に處するのでなくては、到底自ら平和の生活を營み、他に對して、大悲博愛の念を起すことは出來ぬのである。

今四恩を現代的に云ひ代ゆると、

(一)、父母の恩……家庭的道徳

(二)、國王の恩……國家的道徳

(三)、衆生の恩……人類的道徳

(四)、三寶の恩……宗教的道徳

となり、吾人は總て以上の四種の道徳を實行し、四種の恩に報謝せなくては、自己人格の完成は遂げられぬのである。

然るに現代人は、淺薄なる物質主義と、功利主義とに、教養せられたる結果、恩と云ふ觀念を全く忘却して居る。彼等は宇宙の靈妙なる理趣も、人生の情致ある趣味も、理解すること能はず、存在する物は數と量とに於て、計算し得る物質世界のみであると考へ、從つて人人融卽加持せる、靈的、同情的人道の尊きことを忘れ、人と人との間は、唯だ利害の關係のみにて連絡されて居るのみとなり、利害關係の厚薄以外に、何等の情味も無き社會となつて居る。

利己的功利主義を信條とする現代人は、日々の衣食住と、色欲とを滿足する外、そこに何等の理想もない。彼等に採りては社會の總てのものは、自己の滿足を買ひ得る、物質を求むる爲の方便である。父母兄弟も、先輩朋友も、其他社會の一切の存在は、醜惡なる利己滿足を買ふための手段に過ぎぬ。

現代に於て自己の滿足を充たし得る物は、要するに黃金である。黃金すら得たならば、一切の物質的要求は滿たすことが出來る。かくて彼等が孜々として勤勉するのは、唯だ黃金を得んが爲めである。故に若し努めずして得る方法あらば、それは猶吏ら彼等の望む所である。かくて彼等には事業に對する理想も無い。黃金すら得らるゝならば、世を害し、人を欺いても、敢て辭せずと云ふことになるのである。

今や斯の如き徒の多くが、成金として天下に横行して居る。黄金萬能の成金者流が、其の私欲を逞しふする爲に、如何に人道を害し、政治を過り、社會の進歩を阻害して居るか、斯の如き無精神の輩によつて、黄金が善用され、文化が進む時が來るならば、水は山へ向つて奔るであらう。

彼等の成功せる者を見よ、得意滿面、世に驕り、人に高ぶり、剛慢不遜、唾棄すべき態度を振舞ふて居るが、彼等が失敗せし時は、不平を唱へ、不滿を訴へ、好んで長者に反抗し、怠惰放逸を極め、世を詛ひ、人に背き、終には盜賊の群に入り、亦は乞食の徒と爲るのである。要するに恩と云ふことを忘却せる、利己的功利主義の徒は、成功しても失敗しても人道を害することは一つである。

恩と云ふ觀念は、自己の生を喜ぶことから始まる。自己今日の生活を幸福なりと、歡喜して自己の過去と、現在の環境とを回顧して、是れ果して自己の力によるか、他の力に基くかを熟思し、自己の力の弱少なることを覺知すれば、茲に宇宙間總ての力に感謝する心が、自ら湧き來るのである。故に感謝生活を爲し得る者は、凡ての不滿足から脱却せる樂觀者である。而して宇宙に於ける他の力の中、特別に大なるもの、否其總てのものは、乃ち上述の四恩である。

故に感謝の生活は、先づ此の四恩に對して發露するのが當然であるが、其平常生活の狀態は一切の事々物々に對して、「勿體ない」「有難い」、と感ずる狀態となるのである。現今の青年子弟の感情中には、此の「有難い」、「勿體ない」と云ふ意識が殆んどない。已に老人となれる、明治の初年頃迄の人々は、毎朝起き出づると、面を洗ひ、口を嗽ぐと、直に太陽に向ひて、拍手し、禮拜し亦屋内に入りて、神棚と、佛壇に向ふて、禮拜をして來たものである。

現今の少年は、物質科學の思想に富んで居るから、「太陽は火の球である、火の球を拜むのなら、ランプや電球を拜むがよい。」など、云ふて、中々承知しない。勿論太陽は火の球には相違ないが、老人達が是を拜む觀念は、其の火の球でも、吾人の生活を幸福にしてくれて居る點を感謝するのである。無生物を拜する愚を笑ふか知らぬが、寧ろ宇宙の大意匠を看取して居る點は、老人達の知識の方が餘程進んでは居らぬか。

必ずしも太陽を拜めと云ふのではない、宇宙間の總ての物に對して、同情し感謝し、宇宙の意匠、萬象の神祕を、體悟するのでなくては、人生は冷索無味となり、物質以上の靈物である

ことを、悟る時が無いのを憐れむのである。吾人が我が生を喜ぶにつけ、一碗の食も、一枚の紙も、一着の衣も、一册の書も、如何ばかり尊く、如何ばかり勿體なき物であるかを知ることが出來ると共に、父母、朋友等が如何ばかり有難きものであるかを、諦め識るやうになり如何なる時にも、感謝の觀念の外に、妄念を起さぬやうになれば、是れを法悦に浴した生活と云ふのである。

基督教徒の家庭では、食事ごとに打揃ふて、神に感謝の祈禱を捧げて居る。從つて彼等の食事は、最も靜肅に、愉快に行はれて居るに反し、佛教徒の多くは、食事の時に佛に感謝することをしない。從つて日本人は食事の時に、服裝も亂雜で、酒の燗の冷熱とか、蔬菜の味の辛ひ甘ひとか、聽くに堪えぬ小言を云て、毫も敬虔の念が無いのは、同じ人間として、誠に下劣の品性を露はして居ると云はねばならぬ。

佛教にも僧侶は、食事の作法があつて、當に食せんとする時は、先づ十方の諸佛並に三品の聖者、六道の衆生に供養し、次に施主の幸福を祈り、自己の德行を反省し、道業の成就を祈願することになつて居る。併し近來持律の風が衰へると共に、此大切なことすら廢れて仕舞ふて居る。吾人は僧侶と信者とに限らず、食事の時は必ず佛天並びに、一切衆生に感謝廻向する、習慣を作らねばならぬと思ふ。已に食事の時に、佛天に祈る習慣を作れば　如何なる家庭にても、日に三度づゝ宗教的觀念を修養することになるから、各家庭内の修養上に非常なる影響があることになるであらう。

四恩の中の父母の恩は、之れを擴張すれば、祖先崇拜の觀念となる。佛教徒の家庭に於て、祖先の追善供養を行ふと、朝夕佛教の禮拜をなすとは、追孝の觀念を新にするものであつて、亦家庭内に、長幼序であらしむる美風である。

父母及び他の長者に習ふて、知恩報恩の行爲をなす者は、自己の妻、並びに子供、婢僕などに對しても、亦夫れ相應の恩を感じ、德に報ゆる精神が出來る。かくて自己の眼下の者に對しても、常に其人格を尊敬し、其心情を愛憐し、苟くも輕侮し、虐待する心を起さぬやうになるのである。

大師の尊皇報國主義は、高野山を建立せし時の結界の文に、

「願はくば此の道場は、普く五類の諸天、及び地水火風空の五大の諸神、並に此の朝開闢以

來の皇帝皇后等の尊靈、一切の天神地祇を以て壇主と爲さん。」

と曰れしに就て見ても、全く國家を鎭護する爲に、立敎開宗せられし本意を窺うべく、亦大師が一時病に罹られし時、大僧都の職を解かれんことを請はれし奏狀は、實に其の眞意を吐露し臣子の情誼を盡して居る。

「空海恩澤に沐せしより、力を竭して國に報ずること、歲月既に久し。常に願ふらくは蚊虻の力を奮ふて、海岳の德に答へんことを。然るに今去月盡日、惡瘡體に起つて吉相現ぜず、兩檣夢に在り、三泉忽に至る。龍顏を戀ひて呼咽し、鸞闕を顧みて肝を爛らす。夫れ許由が小子なる、猶萬乘を脫る、況んや沙門、何ぞ三界を願はん。伏て乞ふ永く所職を解いて、常に無累に遊ばしめんことを。但愁ふらくは幸に輪王に逢ひ奉つて、所願を遂げざることを。伏て請ふ、陛下終に臨むの一言を願み玉ふて、三密の法敎を弃て給はざらんことを。生々に陛下の法城と爲り、世々に陛下の法將と爲らん。心神恍惚として思慮陳ぶべからず。」

語何ぞ懇切にして、情亦何ぞ悲痛なる。是れ實に大師の衷情を訴へ給ひしものであつて、大師出世の本懷は、實に密敎の弘通と、皇室の擁護とであつたので、此文を讀む者は、永く大師の精忠に感動すべく、後世大師の創立にかゝる、河州の觀心寺にて修養せし、大楠公兄弟が、七世報國の志しを定めしことも、全く大師の遺志に基いたものである。

若し夫れ大師が、如何に社會、民衆に對する報恩の念に燃え、人類愛の心が熾んなりしかは、

「我は法界に恩を報ずるの子なり」

と喝破せられし、聖者としての態度を仰ぎ見るべきである。今や社會奉仕の呼び聲は、至る所に喧すしいが、誰か純潔無垢、獻身的に社會民衆の爲に盡くす者ぞ。吾人は常に大師の高潔無比の靈格を讃仰せねばならぬ。

亦大師が宇宙の神靈と感應し、常に佛陀慈悲の光明に浴せられし、敬虔眞摯なる態度は、今更ら說明するを要せぬが、左の嵯峨天皇に奉られし詩に依つて、其一端を窺ふべきである。

「方袍苦行す雲山の裏。風雪情無くして春夜寒し。五綴持錫して妙法を觀す。六年羅衣にして蔬飡を啜る。日と月と與にして丹誠を盡す。覆瓮は今堯日の寬かなることを見る。諸佛威護して一子の愛あり。何ぞ人間の難を惆悵することを須ゐん。」

六、現世充足（上）

大師は、龍猛菩薩の造られた、「菩提心論」中の、

「若し人佛惠を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速に大覺の位を證ず。」

と敎へられた文に依つて、佛凡不二、卽身成佛の敎を開創せられたのである。

卽身成佛と云ふことに就いては、當面二つの問題がある、一は法相、三論等の如く、凡夫が成佛するには、三大無數劫と云ふ、長き時間を要すると云ふに對し、速に此身のまゝにて成佛すると云ふこと、一は淨土眞宗の如く、十萬億土の西、卽ち淨土の空間が、遙かに此人間世界を離れて居ると云ふに對し、密嚴國土は、此娑婆世界其まゝであると云ふ、二つの事が、顯敎諸宗に對して全く特殊の見解に立つて居ることである。

是れ卽ち眞言宗の現世主義であるが、其現世主義と云ふことに就いて、現時の唯物論者や、藝術家等に依つて唱へらるゝ、物質的利己主義の主張や、刹那的情慾本位の人生觀も、亦現世主義ではあるが、大師の人生觀は、一面超越神祕主義にして、併も亦他面人生の一切を肯定する、常識主義の點が、內容に於て非常なる懸隔がある。吾人は是れを名けて靈肉一致の現世充足主義と云ふのである。

今此意義を明かにせんために、大師の「十住心論」に基いて、一應、佛敎各宗の人生觀、西洋哲學思想の發達の狀態、現在日本人間に於ける、宗敎意識の種々相を參照して、以て大師の眞意を宣明しようと思ふ。

「大日經」の住心品に基いて、大師が說述せられた十住心とは、

一、異生羝羊心、　二、愚童持齋心、　三、嬰童無畏心
四、唯蘊無我心、　五、拔業因種心、　六、他緣大乘心
七、覺心不生心、　八、一道無爲心、　九、極無自性心
十、祕密莊嚴心、である。

第一異生羝羊心、異生とは大師が「生れ生れ生れて生の始めに闇く、死に死に死に死んで、死の終りに闇し、」と仰せられし如く、生死の理を解せずして三界六道に輪廻することを云ふのである。羝羊とは、愚童凡夫の類は、猶し羝羊の如しと示されて、其愚昧なることを羊に

例へたのである。大師は

「凡夫善惡を知らざるの迷心、愚者因果を信ぜざるの妄執なり」

と說かれて、此境界は未だ毫も敎への立たざる分齋である。

「火宅の八苦を覺らず、罪報の三途なることを信ぜず、滋味を水陸に嗜み、華色を乾坤に耽る。鷹を放ち犬を催ふして、塡腹の禽命を斷ち、馬を走せ弓を彎いて、快舌の獸身を殺す。（中略）荒婬度無くして晝夜に樂むこと甚し。」

とは、十住心論の說示であるが、「秘藏寶鑰」は、

（前略）父子の親々たる、親の親たることを知らず、夫婦の相愛する、愛の愛たることを覺らず。徒に妄想の繩に縛られて、空しく無明の酒に醉へり。（中略）强竊二盜は珍財に迷つて戮を受け、和强兩姦は娥眉に惑つて身を殺す（中略）無慚無愧にして八萬の罪盡く作り自作敎他して塵沙の過常に爲す。」

と、仰せられた。右に依つて見れば、今日文化人と呼ばれて居る、所謂成功者、富豪、成金者流が、妾を畜へ、酒色を恣にして居る生活狀態は、全く此異生羶羊心に當てはまつて居る。

更に其精神狀態を說いて、

「有るが曰く、人は死して氣に歸る、更に生を受けずと。此の如きの類をば斷見と名く。有るが曰く、人は常に人たり、畜は常に畜たり、貴賤常に定まり、貧富恒に分れたりと。此の如き類をば常見と名く。或は牛狗の戒を持ち或は恒河に投死す、斯の如きの類をば邪見と云ふ。」

と申されてあるが、因果を知らず、死後を懼れず、唯だ生前の榮華のみを求めて、求むるに其手段を選ばず。日夜罪惡を犯して、敢て顧みざる狀態は、是れ亦唯物思想に沈沒して、道德心を麻痺して居る、現代の多數人が全く此通りである。

第二、愚童持齋心。

愚童持齋心とは、前の住心に於ける、一向に惡業のみを行ふ、愚昧なること童子の如き者が漸く善心を起し、（持齋とは印度の習慣にて、身心を淸め、節食して施しを行ふことである）他に對して、慈善事業を爲すに至つたのを云ふので、所謂人道敎である。

「物に定まれる性無し、人何ぞ常に惡ならん。緣に遇ふ時は、庸夫も大道を庶幾ふ。敎に順

する時は、凡夫も賢聖に齊しからんと思ふ。羝羊自性無し、愚童も亦愚に非ず。是の故に本覺内に薫じ、佛光外に射して、炊爾に節食し、數々に檀那す。」

是れ乃ち、彼の成金者流が、一時黄金の波に醉ふて、亂暴狼藉、罪惡のみの生活を恣にして居る間に、其物質的、肉慾的榮華に飽きたる時、其無意義なる生活に驚き、茲に社會奉仕の志しを起して、學校を樹て、慈善病院を企て、或は寺院に寄附するなど、社會的精神を起し亦顧みて家庭を整理し、長上を敬ひて、道德的に身を修むるに至る狀態である。

「五常漸く習ひ、十善を鑽仰す、五常とは仁、義、禮、智、信なり。仁とは不殺等に名く、己を恕つて、人に施す。義は則ち不盜等なり、積んで能く施す禮は不邪等なり、五禮序で有り。智は是れ不亂等なり、審らかに決し能く理はる、信は不妄の稱なり、言つて必ず行ふ。」

とて、儒教の五常と、佛教に於ける在家の戒法である五戒とを、一として示されて居る。

五常
- 仁……不殺生
- 義……不偸盜
- 禮……不邪淫

五戒
- 智……不邪見
- 信……不妄語

是に依つて見るも、内に道德的精神の萌すと、外に社會奉仕の觀念の起るのは、常に相伴ふもので、現在の社會奉仕の事業の起らざると、所謂紳士の家庭の紊亂せるとは、内外相伴ふて居るのであつて、我社會の上下が、物質的利己教育に累せられて、腐敗墮落を極めたる結果、國家社會の改良は、一も見るべきものなく、此不條理なる、一部少數人士の亂行を恣にするを爲に、多數の無産階級者を犧牲にする如き、不道義の社會を、人道的に、將た經濟的に大改革せんとする主張の起るのは、實に當然にして、亦必然のこと、云はねばならぬ。吾人は政治の局に當る者は、須らく社會民衆を率ひて常に國家を人道的に改善進歩せしむることを怠らず徒に一時的利權を弄びて、却つて國家的大爆發の起ることのなきやう、戒心すべきである。

「金光明王經」に曰く、

「若し惡を見て遮せずんば、非法便ち滋長して、遂に王の國内をして、奸詐日に增々多からしむ。」

と、教へられてあるが、現今我國内には、奸詐日に增々多くなり行き、惡を見て遮すべき筈の貴衆兩議院が、朋黨比周、一部の人の便宜を計る機關の如くなり、國家民人の幸福を度外にして居る形勢の見ゆるのは、實に國家に於ける、何よりも大なる罪惡で、長嘆すべきことである。

第三、嬰童無畏心

嬰童無畏とは、原始的宗教心の發生せし分齋であつて、其智識は未だ劣等にて嬰童たるを免れざれども、一分宗教的安慰を得るを以て、無畏と云ふので大師は左の如く釋されて居る。

「外道人を厭ひ、凡夫天を欣ぶの心なり。（中略）小分の厄縛を脱するが故に無畏なり、未だ涅槃を得ざるが故に嬰童なり。」

以て名の意義を知るべきである。

茲には、主として印度に於ける婆羅門教の欲、色、無色、三界の二十八天に上生する爲に、修行せし教法を以て、此住心に當るとせられて居るが、現今に於ける我宗教界を見れば、神道と稱して居る天理教、黑住教、金光教、蓮門教乃至大本教の如き總ての宗教は、此範圍に屬すべきものであり、基督教の如く理由なく宇宙を創造せる神ありと立つる宗教は、亦其因果の理を撥無する點に於て、此分齋と定むるものである。大師は是を左の如く說かれて居る。

「問ふ、諸の外道、同く三學を修して、彼の二界に生じ、空三昧を證して、言亡慮絕す。何に由つてか、煩惱を斷じ、涅槃を證することを得ざる。答ふ、觀、二邊に着し、定、二見に滯するが故なり。問ふ、同じく非有非無を觀ず何ぞ二邊、二見に墮するや、他主に繫屬して因緣の中道を知らざるが故なり。」

卽ち、佛教の因緣生、無自性の觀智に依る、中道實相觀を別にして、其所緣の本尊、卽ち神を獨自に成立せりとするは、斷、定、二見の邪見なるが故に其信仰、修養、亦法悅三昧の狀態は、如何に意義あるが如きも、根本に於て迷妄を存するが故に、未だ佛教の初門にも達せざる迷論邪教なりとするのである。

然れば、佛教中に於ても、否、例令眞言宗の名に依つて、行はれつゝあるものにても、若し此の因緣無自性の觀智に依らず、所對の本尊を、妄想分別に依りて渴仰し、利己的慾望のみを滿足せしめんとして、祈願するが如き場合あらば、當然此住心に攝せらるべきものである。吾人は今日我宗内に於ける歡喜天、毘沙門天、若しくば佛、菩薩等の信仰が、斯の如き、妄念邪

義に汚されて居らぬかを疑はざるを得ぬのである。

第四、唯蘊無我心

第五、拔業因種心

此二住心は、佛教に於ける、聲聞、緣覺の二乘の教理を配當せられたものである。二乘は人我の迷ひを破りて、唯だ法のみありと識る境界である。五蘊乃ち識、受、想、行、色の物心の二法は實在すれども、其の二法より現出せる、人間の個體は無常生滅の體であるから、苦、空無常、無我の四諦の理を念じて、全く空なりと觀じ去るが、此住心の精神である、故に唯だ、五蘊のみ在りて、人我は無しと云ふ故に、「唯蘊無我心」と云ふのである。是れを古歌に

引き寄て、結べば柴の庵なり、
解きなば、もとの野原なりけり。

と歌ふて居る。第五住心は、此人我の姿は、前生の因緣に依りて生ぜるのものであるから、此因緣を生じた、業の原因種子を、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二因緣の觀念に依りて、全く拔き去るので之れを業煩惱の因緣、種子を拔くと云ふ意にて、名を立てたのである。

此の二住心は、人とか我とか云ふ個體は、畢竟無明執着に依りて出來たものである。從つて人生は、生、老、病、死、怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦、の四苦八苦に惱まさるゝ火宅である。故に四諦、十二因緣の觀念に依りて、人世を解消し去る修行を爲し、終に身を燒いて灰となし、心を滅して、單空寂滅の境界に入らうとするのであるから、徹底せる厭世主義と云ふべきである。

厭世思想は、東西の思想中に、決して尠からぬのである。人世の眞相を熟視せんか、衣、食住、名譽、權勢、智識、生命等の諸欲望は、日夜に熾んに燃ゆれども、これを獲得して滿足を得るものは殆んどない。偶、競爭場裡に成功して、欲望を滿足せしめ得たる者の半面には、一將功成りて萬骨枯る多數の犧牲者を生じて居るのである。或る人が大閤秀吉に、「驕る者久しからず」と答へし、と云ふ如く、人生は、

終に行く、ものとはかねて、聞しかど、
きのふ今日とは、思はざりしを。

であつて、人我共に北邙一片の煙と化し去るのが定まれる運命である。此の絶對的眞實である、死の關門に對して、厭世觀を生ずるのは、人として當然のことであるが、吾人の意識は飽くまでも生を求めて止まず、例令死するも死滅を滿足して居るのではない。厭世觀は人世の矛盾相を、明示せしものなれども、終に吾人に最後の滿足を與へぬ、吾人は更らに進んで大乘教に於て、積極的滿足の法門を闢き來らねばならぬのである。

七、現世充足（下）

第六他緣大乘心

此の住心は、宗旨を以て云へば、法相宗、唯識論に說く所に當るのである。前住心に實在せりと考へし、人我の本體色心の二法をば、第八識阿賴耶識より變現せるものなりとし、三界唯一心、心外無別法と談ずるので、此阿賴耶識は一切萬物の本體、同時に自己の本心なれば、彼の聲聞緣覺二乘に於て、妄心所現、苦空無常無我と觀ぜし人世は、要するに一心內の存在物なれば、實在の本原なる阿賴耶識の下には、人我一體である。故に自ら心の本體を悟りて、常住不變の境に入らんとすると共に、一心內の變現である、客觀社會卽ち他人も、本來他と見做すべきものでないから、同時に救濟せねばならぬ。茲に彼の灰身滅智して、空寂なる涅槃の境に入らんとせし、自利一面の修養者なる聲聞、緣覺の二乘に反對して、一切の他人をも必ず救濟せねばならぬ精神を起し來り、利他的行動を起すに至る、是れを他緣と云ひ、大乘とは、自利一面の聲聞、緣覺、二乘の教は個人的なる小さき乘り物であるが、此住心以上は利他的救濟をも共に計るを以て　大なる乘り物と云ふ意義で、廣大なる教へと云ふのである。

佛教は大體唯心論的傾向を以て居るので、唯物論は無かつたと云ふも殆んど可なりである。併し小乘教中の俱舍論などは、心と物質との二法は實在すと云ひ其心は物質に相對する、一種の物であるから、唯物論とも云へば云はれる。此唯識論以上は、皆此阿賴耶識の物心二法を包含せる藏識を、基礎として義を樹てゝあるので、天台、華嚴に至るも、唯心論の色彩を離れぬのである。

第七、覺心不生心

此の住心は、三論宗の分齊である。三論宗は八不中道と說いて、法相宗が三界唯心と說き、

其識の上に顯現する現象は、因緣の法に依り、假に存在するものであると云ふに對し、其の識の本體も、現象も共に眞有妙空にして、凡夫の機上に取捨すべからざる、不生不滅、不增不滅不一不異、不去不來の眞如法性なりとし、一切の偏執より脫却すべく、心不生の道理を高調する宗敎であるから、心の不生を覺ると云ふ、名義を附せられたのである。此住心は遙に人世より超越して、無染無着の靈境に優遊するを以て、本旨とするのである。

多少其の意義は相違して居るが、少欲知足主義を以て、恬淡無爲の生活を主張する者が西洋古代には、ギリシヤのダイオゼネス、東洋には老子、莊子の如き者がある。亦我邦にても多くの佛敎僧侶は、禪僧を中心として、少慾知足を以て生活上の主義としたものである。

所謂「座る半疊、寢る一疊、月光は招かざれども家根に漏り、花片は待たずして室に入る。

物持たぬ、袂は輕し、夕涼み

本來無き物は、盜まるゝ憂ひなく、滯る所なければ宿を移すに心殘らず、青山を伴にすれば命自ら長く、流水に從へば心亦淸し。日出づれば耕し、雨降れば卷に對す。白雲の湧くが如く生き、暮鴉の歸るが如く死す。無何有の鄕に橫臥して、彼の齷齪者流を哀れむ。之れ亦一種の生活主義であらう。封建時代の社會は、自由進取の思想を束縛し、祖先傳來の家業を守せしむる必要上、少欲知足を以て天下萬衆の道德と敎へたのである、我が德川時代に於ても、

上見れば、何ほし、彼ほし、星だらけ、
下見て暮せ、星の影なし。

など云ふ歌を以て、社會民衆を訓練したものである。自主自由を信條とする現代人には、最早斯の如き消極主義は容れられず、文化の發達して居る現代にては、進取向上は唯一のモットーであつて、退いて守ると云ふ、少欲知足主義は社會を率ゆるに足らぬことになつた。

第八、一道無爲心、

第九、極無自性心、

此、八九の住心には、天台宗と、華嚴宗とを、配當するのである。天台宗も、華嚴宗も、眞如法性の理を談ずること幽玄を極め、或は一念三千と云ひ、亦は事々無碍圓融と云ひ、娑派卽寂光、凡卽是佛・煩惱卽菩提と觀ずる點に於て、其談義の調子は、眞言宗と殆んど異る點が無

いが、其法性眞如の本體が、一實中道の超絶界にして、未だ六大體大、差別本具の法身を識らず。亦眞如法界、性海果分の至極は、不守自性隨緣して、無盡無窮なりと說くが、未だ法性の當相、直に四曼相大にして、法身の靈動、法爾に三密の妙用である理を知らず。大師は、是れを判じて、兩つながら無明の邊域にして、明の分位に非ずと云はれたのである。

此本體界と現象界との關係の考察から、西洋哲學に於ても、カントの認識哲學、スペンサーの不可知哲學の生ぜしは、恰も我法相の唯識論、並に三論の八不否定の超越論を見るが如く、亦ヘーゲルの理想哲學や、ショーペンハーエルの意志哲學は、天台宗の三諦圓融觀や、禪宗の意的修養を高調して、本來の面目に到達せんとするのと類似して居る。更にハルトマンの、無意識哲學は、華嚴宗の法界緣起觀に、一脈の融合點ありと見るべきか。

此本體眞如界と、現象凡夫界との、相卽融合の關係を、實際的に實現せんとする者の中、理智的傾向者は理想主義となり。感情的傾向者は、他力的未來主義となり。意志的傾向の猛烈なる者は、直に成佛の實功を擧げんとして、座禪辨道するに至るのである。

理想主義は、現在の天台、華嚴の如き、所談の理は高遠を極むれども、要するに精神的に佛果界を憧憬するに止まり、實際的效果は多く期待するを得ず、永く哲學的宗教として存在するのである。

意志的修養を高潮する禪宗の所談は、其談義は寧ろ前二宗の如く微細を極めざれど、慕直に打開し來る所は、卽心是佛の大道であつて、是亦永く社會一類の人士に、向上の一路を示すものである。

未來主義は、理想と現實の矛盾に對する、徹底的罪惡觀の結果、終に人間の能力一切を否定し、絕對救濟主を肯定して、茲に阿彌陀如來の本願に依りて、西方往生を欣求し、報謝の道德を說いて、人道との調和を計り、宗教としては人心を動かすこと最も深きものである。

是れを要するに華、天、禪、淨、の各宗は皆大乘圓融の敎へであるが、佛凡の隔歷を感情的に、意志的に、理智的に融合せしめんとする、一方面づゝの運動であつて、未だ智、情、意全體、本來融合の眞理趣に達して居らぬのである。

第十、祕密莊嚴心

本體界と、現象界とが、眞實に融合一致せるものならば、人世は直に佛國であり、佛果の曼

茶羅莊嚴世界は、直に吾人の眼前に展開されねばならぬ。現世淨土、人間卽佛、茲に我が神祕主義は、生れて來ねばならぬ。

若し、實在現象一如ならば、人世本來の當相は、罪惡であるべき筈がない。茲に人間本位の常識主義、非未來主義が成立するのである。

法然上人や、親鸞上人は、何れも天台の大學匠であつたが、天台宗の理想主義、否本體現象一如論のみにては、其餘りに深刻なりし、人の子としての罪惡觀を脫却することが出來ず。終に絕對的圓融觀に肉を附したる無限の能力ある靈格者、報身阿彌陀佛の他力本願を憧憬し、未來往生主義を唱ふるに至つた。かくして厭離穢土、欣求淨土は、淨土、眞宗の標語となつた。此最上の哲理に依つて、樹立した未來淨土主義は、素朴的に宇宙創造の神を信ずる如き、淺薄なものではないが、しかし極樂と人世とを隔離し、人世そのまゝを徹底的に、靈化する「不二」の深義を發揮することが出來ぬのは遺憾とせねばならぬ。大師は

「人法、法爾たり、興廢何れの時ぞ、機根、絕々たり、正像何ぞ別たん」

と喝破せられて、佛凡共に絕對無上の、靈格者であつて、彼の正像末を別ちて、人と法とを末代的に引下ぐるの愚を痛擊し、自ら卽身成佛の範を示して、現世爲本の義を確立せられたのである。「大日經」に、

「若し法性を出でて、外に別に世間の文字有りと云はゞ、則ち是れ妄心の謬見なり。」

と云へる義に從へば、徹底せる見地に立てる、人間本位主義であつて、人間を外にして、佛陀ありと觀じ、現世を度外にして、極樂世界ありと想ふは、是れ實に妄心の謬見である。

なか〳〵に、人里近くなりにけり、
あまりに深く山を探ねて。

と云ふのは、禪家の道歌であるが、直に法性の源底を衝きたる者にあつては、最後は依然たる人間界に返り來りて、尋常茶飯事是れ佛道と云ふことになるので、「靈化されたる完全なる人間」是れ實に現世成佛の眞義である。茲に於て大師主義は亦やがて偉大なる常識主義となるのである、大師の神祕的靈格に卽して、亦一面文化的常識に富み給ひたる、圓滿なる人格は亦此理に淵源せることを諭るのである。

已に靈化せる常識主義であるから、神祕主義なれども、反道德的信仰を拒否するのである。

超越的たると同時に、科學を尊重するのである。

然れば勿論、現世爲本、人間尊重、靈肉一致主義なれども、西藏ラマ敎の一派に行はるゝ性的肉交を目的とする、修行を容れ得るほど非常識ではなく、亦日本に於ける立川流の如く、性の問題肉の歡樂を、修道の中心とするが如き、反道德的邪執に囚はるべき筈がない。

「六大無碍にして、常に瑜伽なり、四種曼荼、各々離れず、三密加持すれば、速疾に顯はる重々帝網なるを卽身と名く。」

右は、「卽身成佛義」に於ける、卽身成佛の眞義を說かれたる偈であるが、吾人は本有に六大、四曼、三密の靈德を具せるものであるから、吾人がありのまゝに活動する時は、體相用の三大靈動して、神祕不可思議の境界が、一時に炳現するのである。若し能く祕密眼を開く者あらば吾人平生の生活の上に、刻々此深趣を看取し得るであらう。吾人は神祕主義と現世充足主義との、不二の妙趣を覺らねばならぬのである。

八、神祕體現

大師御一代の行蹟を拜するに、懷胎の靈夢、幼時の禮佛、室戸崎の明星來影、久米寺東塔の大日經感得、恵果阿闍梨と値遇の因緣、高野山開創の靈異、諸種祈禱の靈驗等、實に神祕的事蹟多く、凡て不思議の雲に包まれて居る感がある。

古來宗敎家と、奇蹟とは附帶物であつて、日蓮上人、親鸞上人には相應に奇蹟談があり、道元禪師、法然上人の如き、努めて平凡を旨とせられし高僧の上にも、尙普通人以上の靈異ありしことが傳へられて居る。古代の宗敎家中には、役の行者、越州の泰澄、行基菩薩の如き、多くの奇瑞を傳へられた者もあるが、我大師は、單に佛敎徒のみならず、日本宗敎家中の、最も偉大なる神祕家たりしことは、疑ふ餘地がない。

勿論、應天門の額の、放筆點の談や、在唐中の五筆和尙の名の出所などを、餘り非常識に傳ふる者があるから、大師を奇術師の如く解する低級の信者もあり、亦四國靈場、其他日本到る所に於ける大師の遺跡と稱せられる、所の十中七八は、殆ど荒誕無稽の造り事と云ふべきであるが、假令斯の如き多くの迷信を除き去りても、大師の神祕的人格は、奇術師的行爲の點にあるのではなくして、寧ろ常識以上の不可思議なる、靈性を發揮せられた點にあることが認めら

る、のである。

近時物的科學思想の一面より、宗教的奇蹟を目して、全く迷信妄想として排斥し去る者多きも、是れを信仰者の實驗に徵しても、心理學者の研究に依りても、將た神祕哲學上の觀察よりするも、亦最近の物理化學者中に、特に科學的に是れを證明する者が生ぜしに見るも、宗教的奇蹟の全然否定し得べからざることは明かである。否宗教に奇蹟の伴ふことは、寧ろ宗教的常識なりと云ふも過言ではない。

基督が、多數の病人を治癒せしめたことは、バイブルの中に記されて居り、爾來同教徒内に、神祕思想は常に絶ゆることなく、中世紀には最も盛大を示したのであるが、最近、英、米二國などに、病氣平癒の祈禱が盛んに行はれて居り、病人の六割、乃至八割が、祈禱に依りて全快する、統計などが發表されて居るのである。

支那にも、古來種々の禁厭呪術が行はれ、就中道教に依る、長生久存の法、空中飛行の術、亦は易學の人世判斷、五行宿曜、方位の說など、有限の人間が、無限の自然に對して、何等かの助力を得る爲に、其方法を求めて止まざる狀態は、何時までも停止する時が無いのである。

我邦の神道に就て見るも、官邊一應の解釋では、到る所の神社は、唯祖先崇敬のために存するが如きも、其氏子は吉凶禍福を、皆其祠前に祈つて居る。亦黑住教の黑住宗忠、天理教のおみき女、金光教の金光某、尙最近大本教の某の如き、何れも其信者間には、奇蹟的行爲を崇信せられて居る。其他我邦の到る所に談られて居る、彼の狐つきとか、狸下ろしとか云ふ如き、最も原始的なる神怪談も、往々全く否定することの出來ぬものも存するのである。

眞言宗では、印度に於ける婆羅門教の作法を、直に密教の眞空妙有の思想に依つて淨化し、心と佛と衆生との三が、無差別平等となる見地より、加持祈禱を行ひ、本尊の大威神力に依つて、行者の祈願は直に成就せらるゝことになつて居り、その祈禱法に、息災、增益、敬愛、降伏の四種があるのである。現在、成田山の不動尊に於ける、牛駒の寶山寺、讃岐の八栗寺、大阪の南坊、了德院等の大聖歡喜天に於ける、大和信貴山の毘沙門天に於ける、何れも皆此種の祈禱に依りて、日々多くの賽者を惹いて居るのである。

假令、眞言宗の祈禱なりとても、是れを請ふ人には、最も俗情に囚はれ、非理不法を冀ふ者多く、是れを修する僧侶も、亦俗情淨化の理趣に通せず、全く世人に準じて、利慾の念に捕

はるゝ者多ければ、原始婆羅門教の迷執と、何等の異る所なき者多きは、爭ふべからざる所である。大師信者の顧みざるべからざる所は、此點に存するのである。祈禱排斥論者は、時に治癒せざる病人あるを指して、凡ての祈禱を無能なりと叫ぶのであるが、科學的に進歩せりと稱せらるゝ醫術も十中六七以上は、病氣を治し得ざるに見れば、確實なる者は單に科學のみであるとは云ひ得ない。人生は確實なる科學にすら、矛盾を呈せしめる程、複雜を極めて居ることを識らねばならぬ。

然らば他宗教に行はるゝ祈禱法も、眞言宗の加持祈禱も、全く同價値であるかと云ふに、一は眞言宗徒の修觀する悟境は、已に說きたる如く、諸宗に超絕せる最高の境域にて、一切の罪惡障魔を離れたる無上の法門なることゝ、他は其祈禱の方法たる三密の行規が、徹底的に整美して居るとに依り、遙かに一切の迷執を離れ、特に最勝の利益を顯現することが出來るのである。

大師が、神泉苑に雨を祈られしことは、周知の事實であるが、勅命にて皇室の爲に、五十數回の祈禱を爲し、尙宮中に眞言院を創立し、皇威無窮を祈る爲めに、後七日御修法の制を萬世に遺されしは、鎭護國家の大精神を成就せられしものである。「般若心經祕鍵」を講讃して、天下の疫癘を退治せられし時に、特に明記せられし、祕鍵の奧書は左の通りである。

「時に弘仁九年の春、天下大疫す。爰に帝皇自ら黃金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握つて、般若心經一卷を書寫し給ふ。予講讀の撰に範つて、經旨の宗を綴る、未だ結願の詞を吐かざるに、蘇生の族途に彳み。夜變じて日光赫々たり、是れ愚身が戒德に非ず、金輪御信力の所爲なり。但し神舍に詣でん輩は、此の祕鍵を誦し奉るべし。昔予鷲峰說法の莚に陪べつて親り是の深文を聞けり、豈に其義に達せざらんや。」

亦、「大師和讃」に、

「殊に見る目も淺ましき、業病難病受けし身は、八十八の遺蹟に、よせて利益を成し給ふ。」

とある、四國靈場八十八ヶ所の由緒は、充分なる明確さを缺いでは居るが、大師が親しく巡錫せられた遺蹟が、今の靈場となりしことは明白である。此の遺蹟を巡拜する者が、古より年々種々の奇瑞に遭遇し、難治の病の平癒せし者は、擧げて數ふることが出來ぬ程である。四國靈場は大師實驗の結果、開かれたものであつて、深山、曠野、大海、相俟つて身心を練磨し、

大自然の三密と、修行者の三密とが、加持感應して、識らず知らず靈感に打たれ、靈驗を得るに立ち到るので、此宇宙の太靈と吾人の三密とが、加持同交することが、最も大切なる宗教的意義である。此加持感應の意義を、「卽身成佛義」に

「加持とは、如來の大悲と、衆生の信心とを表す。佛日の影、衆生の心水に現ずるを加と曰ひ、行者の心水、能く佛日を感ずるを持と名く、行者若し能く此の理趣を觀念せば、三密相應するが故に、現身に速疾に、本有の三身を顯現し證得す。」

と示されて居る。宗教的靈感は、此加持感應の理に依り、吾人の靈性が開發して、佛陀の靈性と融合ずる、感應同交の上に發作する。卽ち此精神的の佛凡感應は、亦肉體の融合一致となり茲に一切の罪障が消滅すると共に、精神上の煩悶も、肉體上の病氣も、共に治癒せられて、祈禱の功驗を現ずことが出來るものである。

眞言宗には、此祈禱の功果を、三密双修の上に求むるのであるが、三密に就ては卽身成佛義に亦左の如く示されて居る。

「三密とは、一には身密、二には語密、三には心密なり。諸佛の三密は、甚深微細にして、等覺十地も見聞すること能はず。故に密と云ふ。一々の尊等しく、刹塵の三密を具して、互相に加入し　彼此攝持せり。衆生の三密も、亦復是の如し。故に三密加持と名く。若し眞言行人有つて、此の義を觀察し、手に印契を作り、口に眞言を誦じ、心三摩地に住すれば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得べし。」

「十住心論」には、亦下の如く申された。

「一平等身より、善く一切の威儀を現ず、是の如きの威儀は、密印に非ざる無し。一平等語より、普く一切の音聲を現ず、是の如きの音聲は眞言に非ざる無し、一平等心より、普く一切の本尊を現ず、是の如きの本尊は、三昧に非ざる無し。然らば此一々の三業差別の相、皆無邊際にして、庫量すべからず、故に無盡莊嚴と名く。

是れ行者一人の三業修行が、諸佛の加持に依り、無量無邊の三密と現じ、人世に無盡莊嚴世界を現じ、娑婆を一轉して、密嚴淨土たらしむる意義である。大師は此三密の理趣を說明するため、

(一)「卽身成佛義」……身密に關して、

(二)「聲字實相義」……語密に關して、

(三)「吽字義」……意密に關して、

の三書を著し、其詳細を盡されて居るのである。如來の三密も、行者の三密も、平等にして相互に涉入加持し、無盡莊嚴をなすのであるから、絕對界の佛陀、卽ち大宇宙身と、社會民衆と自己の活動とが、不可思議の功德を一にして、純圓微妙の曼荼羅を現はして居る。斯くて法身の上に法爾の三密あるが如く個人の上にも三密あり、亦人類の社會組織の上にも、身、口、意の三密がある。

(一)大毘盧遮那如來
- 身……日月星辰山河草木……佛部三昧耶
- 口……風雨雷鳴溪聲鳥語……蓮華部三昧耶
- 意……四時推移榮枯盛衰……金剛部三昧耶

(二)國家社會
- 身……實業家、軍人、政治家等
- 口……藝術家、辯護士、新聞記者等
- 意……宗教、教育家等

(三)個人
- 身……印契(有相)……舉手動足(無相)
- 口……眞言(同上)……開口發聲(同上)
- 意……三昧(同上)……起心動念(同上)

而して此の最後の個人の三密を成就するのは、吾人の三業を、善化するのを以て出發點とする。卽ち

十善戒
- 身……不殺生、不偸盜、不邪淫
- 口……不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌
- 意……不慳貪、不瞋恚、不邪見

(無相三密)

となるので、先づ吾人の身、口、意の活動が宜しきを得れば、自ら法爾の三密が顯現する。而して前述の如く、此の三密は、推して社會に及び、亦宇宙に涉るのであつて、「大日經」に、

「世尊の身語意は平等にして、身量は虛空に等同なり。」

と、あるに依つて見れば、宇宙に絕大微妙なる三密を、具して居ることが明かであるから、吾人は進修して此の宇宙身を、吾人の身心內に抱擁せなければならぬ。是れを「大日經」に、

「云何が菩提とならば、實の如く自心を知るべし。」と喝破せられたのである。此の自心とは乃ち宇宙心であり、亦宇宙身である。しかも此の眞意義は到底吾人の五感や、普通の意識にて、知ることの出來ぬ境界で、唯三密双修の功德に依つてのみ、體悟することが出來る。世間の心理學者は、宗教意識の完成に就いて、潛在意識の開發とか、神祕意識の覺醒等を主唱して居るが、要するに祕密眼開發の一分に外ならぬのである。

「十住心論」に身心の深祕無量なる旨を說いて、

「三貌三菩提の句を志求する者は、心の無量を知るが故に、身の無量を知る。身の無量を知るが故に、智の無量を知る。智の無量を知るが故に、衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に、虛空の無量を知る。」

「衆生の自心其數量なり。衆生狂醉して識らず、大聖彼の機根を覺つて其の數を開示し給ふ唯濫、拔業の二乘は、唯だ六識を知り。他緣覺心の兩教は、唯だ八心を示す。一道極無は唯九識を知り。釋大衍には十識を說き、大日經王には無量の心識無量の身等を說く。是の如く身心の究竟を知るは、卽ち是れ祕密莊嚴の住處を證するなり。」

斯の如く、無量心あるは、無量の神祕を覺る所以であつて、此人世に卽して此無量の神祕を體現するのが、眞言の實義である。やがて祕密莊嚴、密嚴華藏世界の出現である。大師が

「醫王の目には、途に觸れて皆藥なり、解寶の人は礦石を寶と見る、知ると知らざると誰が罪過ぞ。」

と仰せられて、神祕眼の開發を催促せられて居るのは、人世の當相の上に常に宇宙の神祕が輝いて居るのを、指示せられた警鐘である。

九、世界的靈格

大師主義者としての、吾人の眼吼に映ずる、日本眞言宗は、弘法大師が、獨特の創見に依つて開創せられた、諸大乘教以上の、世界最高、地球上無比の宗教である。

現在日本人の中には、佛教は印度から輸入された教であるから、日本人の宗教ではない、日本人の宗教は、唯神道のみであると考へ、從つて國家政策上より、佛教を度外視する者などが

ある。是は德川時代の、國學者流の偏見から、明治維新前後の、攘夷思想の影響であるが、是は一面宗教と云ふものゝ性質を識らぬのと、他面現在行はれて居る、神道諸宗の性質を解せぬからである。

由來高尙なる宗教は個人的なると共に世界的のものである。そは吾人の救濟を要求する思想は、全く個人的にして何等限らるゝものなきと同時に、吾人の理性は、國家、社會の制限を超えて、宇宙的に擴大する性質のもので、此要求は無條件に充たされなくては、徹底したる安心を得難き、宗教心の本質に起因して居るのである。

然るに世界に於ける各國家は、相互に異れる國民性を有して居るから、超國家性の宗教も、其本質を害せぬ限り、國民の性情に適應して、國民的の宗教となるのである。

佛教は由來世界的宗教であるが、我國に流布するに至りて、能く我が國民性に應同し、印度支那に於けるものとは、其面目を一新し、現存大乘諸宗派は、全く日本佛教と爲り了して居るのである。

然るに頑冥なる國學者流や、固陋なる攘夷的思想家は、何物も日本で生れたるものでなくては、日本のものでないと考へ、單に佛教が印度の釋迦牟尼世尊によりて、說かれたと云ふ理由を以て、宗教意識の徹底、教義の淺深等には一切考量を費さずして、淺狹なる祖先崇拜教の城壁に立て籠り、强いて民族的宗教である神道を主張し、宗教意識の劣等を覆はんがために、佛教の哲理を變說附會するものもありて、以て自ら欺いて居るのである。

亦我國家は、神社を以て宗教に非ずと强辯し、祖先崇拜思想を、宗教以外に超越さしてゐるのは、政策上或は可なりとせんも、現在の黑住、天理、蓮門、御嶽、扶桑、金光と云ふが如き諸宗派を其教義や、其所對の神體が、我古神道と如何に背反して居るやをも問はず、神道と云ふ名稱すら揭ぐれば、直に同一列に配置し、玉石同架以て一千數百年來、我國民文化に貢獻せし佛教以上の待遇を與へんとするが如き、明かに排外的思想に累せられて、宗教思想の文野を識らざる、野蠻的行爲である。

禪宗、淨土宗、眞宗等、現在我國に勢力のある佛教各宗は、印度、支那傳來のまゝでなく、大いに我國民性と同化して居る。日蓮宗に至つては、日蓮主義の人々が高唱するが如く、皇室爲本の宗教となつて居るのである。我大師の尊皇愛國の思想は、前段已に述べた通りであるが

兩部神道說は、或は大師が大成せられたのでないにしても、大師の思想、眞言宗の教格、大師立教開宗の規範が、後に至つて兩部神道を生ぜしめた、基礎を築いて居ることは、眞言宗を研究するものゝ、首肯せざるを得ぬ所である。而して亦日本眞言宗は、單なる傳統的佛教に非ずして、全く獨創的見解によつて成立して居るのである。

近時歴史的、科學的研究の結果、大乘非佛說は、殆ど異論の餘地がないのである。從つて釋尊の佛教は、原始小乘教のみと見て、大なる過りは無いのである。馬鳴、龍樹、無着、天親等の大思想家が出でゝ、釋尊の教義を發達せしめ、印度に於ける大乘教が成立したと共に、婆羅門教の反動的勃興を觀るに及び、大乘佛教は終に印度に跡を絶ち、支那に興隆するに至つた。

支那に於ける、華嚴、天台等の哲學的佛教の隆盛と、禪、淨土等の實際的佛教の擡頭とが、印度の空想的、苦行的習慣より順次に脱却して、現實的、常識的宗教たるべく、理論と、實行との兩方面より押し詰めて來て居ることは、支那佛教史を研究せる者の、容易に認知し得る所である。

更に日本に渡來するに及んで、我國民性に同化し、道德的、常識的、現世的となつて居る、現在の佛教各宗は、釋尊の佛教そのまゝと云ふことは出來ぬ。

我が眞言宗に至つては、始めから大乘佛教の思想を以て、印度に於ける神祕的事法を解釋したものであつて、半面婆羅門的風格が存して居る。然るに印度支那の諸高祖は、未だ大乘中の空門の思想で、婆羅門的行事を解釋したのである。乃ち善無畏三藏、一行禪師等二祖師の思想は、寧ろ大空的批判に立つて居らるゝが、惠果阿闍梨に至つて、有相表德の思想が大に萠し、弘法大師に及んでは、現實的日本國民性を代表して、空門無相の思想を根本より轉化し、六大緣起觀を創說し、卽身成佛、現世成就主義を、力說せらるゝに至つたのである。卽ち能く大師の思想を徹見すれば、佛教、婆羅門教、神道、儒教を混融して、其教義を完成すると共に、苦修實行の結果、徹底的に悉地を成就して、大日如來、遍照金剛として、法身如來の三昧を發揮せられたのである。此點より云へば、上行菩薩の再來と確信せし日蓮上人よりも、應化の尊として出現せられし釋迦牟尼佛よりも、大師の靈格は遙かに偉大であると云ふに、決して過誤は無いのである。

「虛空盡き、衆生盡き、涅槃盡きなば、我が願も盡きなん。」

と云ふ、大師の無限の誓願に見るも、其抱負の如何に、永久的、徹底的なるかを知るべく、若し現代に出世せられなば、更に古今の宗教と、哲學とを打つて一丸とし、偉大なる宗教を建設せらるべきを、想像せらるゝのである。大師主義を奉ずる末徒は、必ず此偉大なる進取的氣宇を、養成せねばならぬのである。

世人は基督を偉大なりとし、其の世界的人格を讃美するのであるが、吾人より之を見れば、バイブルに現はれたる、道德的宗教的哲學的の思想は、必ずしも偉大と云ふに足らぬ。其の閃電的短生涯に於て、成し遂げたりし宗教的功績は、亦質に於て餘人の企て及ぶべからざる、天才的光彩は之もあるも、量に於ては殆ど云ふに足らぬのである。基督の偉大となり得たりしは時代の關係と、其弟子たる使徒等が、相次いで殉教的活動を爲せしによると、歐洲人の宗教となり得たりし點に存すと云ふべきであつて、若し公正に我大師と、比較研究を試みんか、其修養に於て、其悟境に於て、其事業に於て、到底同日の論では無いのである。

釋尊に至つては、其末代への影響は、基督と伯仲するが如きも、其一代の事業は、遙かに彼を凌駕して居る。弘法大師に比し、前兩者が遙かに偉大なりと感ぜられて、世界歷史の上に優勝の位置を占めて居るのは、一は兩者が歷史的先輩である點と、幸に兩大陸に生れて、文化影響の中心點に立脚して居るからである。

吾人は、何時までも所謂、小國、邊土の一沙門として、我が大師を葬り去るべきであらうか我國が東海の一孤島に過ぎず、我民族が、支那、朝鮮以下の劣等民族として看過せられし時代ならば兎も角、今や世界の一等國として、英米に肩を並べ、東西文明の統一者として、思想界に於ても、正に一新軌軸を出すべき、使命を有することを自覺せる場合に於て、此千古の偉人弘法大師の人格、哲學、宗教は、當に如何なる位置を要求すべきであらうか。世界的靈格者として、大師に對する讃仰は、今や世界に向つて、正當なる要求を提出する機會に到達したのである。

十、大師教の將來

大師の教義が、獨特の見識に依つて、大成せられて居ることは、略々前述の通りであるが、滅後一千年間、高野、京都の新古兩派の諸山に於て、教相に就ても、事相に關しても、研究に

研究を重ね、註釋に註釋を加へ、教相の異說、事相の異流、微を極め、細を盡し、殆んど自繩自縛、手も足も出でぬほど、スコラスチックに陷つて居る狀態は、恰も其の昔、大師が寧ろ三途に墮するも、聲緣二乘に陷ること勿れ、若し二乘に墮することあらば、永劫浮ぶ瀨がないと仰せられし、形式的思辨と、定規的法則に囚はれて、博覽外道や、茶の湯修法者となりて、古典的には幾分の生命は存するも、活きたる人間を救ふ宗教としては、淺薄至極と目されて居る天理、金光教等にも劣れる、無活力な狀態に立ち至つて居りはせぬか。

凡そ社會の各事件は、古くは二三百年、近くは百年目位に、改革せられて一轉機を爲しつゝある。宗教は由來傳統的性質のもので、他の方面に比して、持續性の强きものであるが、しかも古き酒は、何時迄も新しき瓮に盛る譯には行かぬ。南都の六宗は、死骸となりて日已に久しく、天台宗は今や將に、頻死の狀態を示せるに徵するも、凡才の輩のみにて傳持せられつゝある、我眞言宗の生命も普通の生命は已に終りに近付いたのであるまいか。若し歷史を超越して益々發達すべしとせば、當然超越すべき條件を、備へて居らねばならぬ。眞言宗の教義、及事相の將來は如何にして、不死の齡を持するのであらうか。

十、大師教の將來

現在眞言宗と云ふ成立宗派は、新古一萬二千の寺院がある。二百萬の檀徒がある譯であるが新古分離し、新義派は豐山、智山の二派となり、古義派は、古義眞言宗、醍醐、東寺、山階、小野、泉涌寺の五派となり、常に各派内の勢力爭ひが絶えず、一向精神的活動を見ることが出來ぬ。今や僧團としての眞言宗は、如何なる人格者があつても、是れを統一し、調制して復活する見込が、殆んど絶無である。是れは普通人間の小欲望で、取り扱ひ行く權勢的事業は、世界各國の興亡史が示す如く、一千年以内で生命を失ふ原理に適應しつゝあるのであらう。比較的に尙勢力の有る所以は、全く祖師弘法大師の絶大なる力に依るのである。

大師の遺業の一である、眞言宗と云ふ宗教團體は、上述の狀態であり、亦形式教義と、固結せる事相上の生命も、全く活氣を失へるに反して、一個人として何者にも障へられぬ、大師の靈格は、不可思議にも日に月に其勢力を倍加して、赫々たる光輝を放ちつゝある。是れを例すれば、四國八十八個所に參詣する信者は、全國各地、宗派の異同を問はず、年々增加しつゝある。亦全國各地にて組織しつゝある、高野山大師教會支部の會員は、寧ろ眞言宗の檀徒以外に多く、年々其數を增加しつゝある。今や弘法大師は、眞言宗の宗祖と云ふよりも、單に其靈格

を中心として、大師教の開祖としての、大師と仰ぎ見ることが、適當なる狀勢にあるのである是れは寧ろ形式的なる教義、事作法よりは、活きたる人格を中心とする、宗教的生命の有力なる發露と見るべきものであらう。

亦時代の趨勢は、顯密二戒、堅固護持をモットーとせし、眞言宗を變じて、肉食妻帶の俗人宗と化し去つた。是れ一面宗規の頽廢であり、他面宗教意識の變化若しくは進歩である。

總て人文現象未開にして、社會が自然力に壓倒せられた時代に於ては、人間の欲望は、常に自然力に脅威せらるゝを以て、從つて性の問題を罪惡なりとし、精進潔齊、苦修練行するを以て、大自然力たる、神に奉仕する道なりと考へたのである。

是れを史實に徵するも、印度の如き自然力の猛烈にして、人間生活の困難なる所ほど、宗教的苦行が盛んであつた。釋尊は數年間修行の結果、中正穩健なる人道を說くを本旨とし、當時の苦行外道に反對して、蹶起せられたのであるが、印度當時の環境は、人文の發達せる今日より見れば、猶圓滿なる性の解釋を見るに到り得ず、依然として苦行外道に、追隨した觀が存するのである。

支那に入つては、羅什三藏の如き、開放的な聖者もあつたのであるが、要するに、印度の模倣に終つて居る。併し其國風は自ら異彩を呈し、一般僧侶生活の內容、並に法會執行の外儀、及社會的地位は、大に變化して居るのである。

我が日本は、大自然の環境が、印度とは正反對とも云ひ得べきと共に、國民性は、生々主義現實主義、常識主義であるから、宗教的生活も、法式的作法も、印度と一致すべからざるは、明白なることである。故に傳教大師は、比叡山に大乘戒壇を建立し、圓頓戒を主唱せられたのであるか、當時南都各宗の勢力强く、僧侶持戒の行儀は、東大寺に於ける、鑑眞和尙以來の、小乘戒に依つて居つたから、他に對して圓滿主義を持せられた大師は、其少年時代より、山水雲霞の間に苦修せられし、御自身の習慣性とに依り、寧ろ小乘戒を持することを、眞言宗徒の本分と定められたのは、亦時代的環境の然らしむる所と云はねばならぬ。

日蓮、法然、親鸞諸上人の時代に至つて、人文の進化と共に、社會的常識が次第に近代的となり、所謂人間味が尊重せらるゝに至り、眞宗を開創するに及んで、終に公然妻常肉食の禁を解いたのは、一は宗義の許す所でもあるが、一は時代意識の進歩の結果に外ならぬ。しかも猶

傳統的的氣分から脱すること能はず、性の問題を依然として罪悪視し、人生を絶對的闇黒界と觀じて居るのは、其未來往生を主張したると共に、意識的進歩と目すべからざるを遺憾とせねばならぬ。

元興寺の僧仲憬が、情事に就いて物議を惹起せし時、大師が赦免の運動をなされたことや、甲山の開基、如意尼の前身、皇妃眞井御前を濟度せられし、同情ある態度に就いて、大師の人情味を推究すれば、大師が如何に人間味に富まれたかゝ伺はれる。大師の人情味に富まれて居たことは、前條已に述べた通りであるが、併も御自身の操守は、少年時代よりの行動に鑑みて、勿論、持律堅固なりしこと一點の疑ひも存せぬ所である。

而して我眞言宗の本義より云へば、「理趣經」に依るも、其他の聖典に依るも決して性慾を罪悪として、取り扱ふては無いのである。亦是れを修する行人に就て見るも、所謂五種の三昧道を達觀すれば、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩の、内印度に於ける釋尊の時代には、猶天上の三昧道も、生ける修行法なりけんが、大師の時代には、已に聲聞、緣覺の二乘の三昧道を、僅に存せしに過ぎず。所對の理趣は菩薩の三昧道を選びながら、行者の持律は、二乘の三昧道に依りたるは、聊か矛盾の觀無しとせぬ。今や人文の進化は、人間本位、戀愛尊重、性の問題は科學的常識として已に決定せられ、人間の本能性は、是れを罪悪視する理由萬ある筈なく、唯常識を以て、適當に所置すべきことゝなれるを以て、現代は人間性を滿足して、菩薩道を修すべき、祕密教相應の時代となつたのである。教義の上より見れば、現代は大師時代よりも遙かに進歩せりと云ふべく、此見地よりすれば、彼の修驗道の教格は、眞言部に比して、寧ろ人間味に徹底せる點に於て、一種の特色ありとも云ふべきか。

宜なり、大師も、

「若し能く進修する者あらば、男女に限らず皆其人也」

とて、同一人格として、男女を平等に取り扱はれて、女は五障、三從の罪人なりとは、仰せられなんだのである。かくて將來の大師教は、全く人間味に充ちたる、一俗人として、直に三密双修の妙諦を現じ得る、人間の三昧道に卽せる、一佛乘とならねばならぬのである。

若し夫れ、世界に於ける宗教を正視すれば、佛教と、耶蘇教とは、世界の二大横綱である。人類文化の統一を豫想すれば、亦此二宗教の調和せらるゝことの、必然性を認めねばならぬ。

若し彼の一神觀的人格を主とする思想と、此汎神觀的靈格を重んずる思想とを統一せんと欲せば、汎神觀に卽して、一神格であり、一神格でありながら、諸佛諸菩薩を圓現する、普門萬德の本地法身大日如來を開示し來る、我眞言宗、大師の敎は、橫統一切敎の本義から、是れを統一する爲に存在する、唯一の宗敎でなくてはならぬのである。

亦大悲博愛、氣宇廣濶なる大師は、能く世界萬邦の人民を、一堂の下に集めて、欣仰措く能はざらしむる本尊であつて、萬國を友とし、各人種を同胞にする、大國民的襟度は、我國民に最も缺けたる點であるから、我國民は須らく此點に於て、大師の風格を師とし學ばねばならぬのである。

斯くて我大師の靈格は、將來釋迦牟尼佛と耶蘇基督に代りて、世界統一敎の本尊とし、法身大日如來として、宇內人類を救濟する曉を見るに至るであらう。

斯の如き大宗敎が、大師を中心として現はるゝことは、現在の眞言宗の中よりするであらうか、將た全く眞言宗を外にして、自覺せる天才の士の蹶起に依りて出來るであらうか、そは今日斷言の限りでないが、大師不死の靈格は、必ず此大業を成就せらるゝことを信じて疑はぬのである。大師は夙に敎へられて、

「法は人に資つて弘まり、人は法を待つて昇る、人法一體にして、別異なることを得ず。」

と、示された。噫、法は已に一千一百年の昔より在り、是れを弘むべき人は果して何處にか在る。

大師主義

終

十、大師敎の將來

大師主義外篇

遍照金剛尊

限りなき、浮世の塵を、吹きはらふ
　たかの、山の、みねの松かぜ

その清き松風が、三寶鳥の聲に和して、長へに微妙なる法音を傳ふる高野の山の御廟窟に、滅びることなき御身を留めたまひて、斷へざる靈動を成されつゝある、我宗祖弘法大師、遍照金剛尊は、幼少の御頃より、夙に崇佛の心はなはだ深く、十二歳の頃より、心は已に佛門に入つて在はせしかども、尚十八歳の頃までは、あるは父君の御館にてまたは都の大學にて、審さに俗典を御研究なされたが、十八歳の時勤操大德より、「求聞持の法」を授かり、近畿の諸山は云ふに及ばず、阿波の大瀧が嶽、土佐の室戸の崎、伊豫の石槌山などの嶮山絶壁を攀ぢ登りて、さまゞ〳〵の難行苦行を積まれ、二十歳の時に至り、終に出家得度遊ばされ、それよりは一層一心專念に、法相の奥義、三論の深趣、法華の妙旨、華嚴の幽意を、普く研究なされたれど、未だ生死解脱、即身頓悟の極致を了解遊ばさることが出來なんだ、サルカラニ二十二歳の頃、更

に極大勇猛心を振るひ起し給ひ、佛前に於て一心に祈誓して、

「空海、佛法に從ひて要津を尋ぬるに、三乘五乘十二部の經も、心神に疑ひあつて未だ以て決となさず、唯願はくは三世の諸佛、十方の薩埵、我に不二の法を示し給へ。」

と、生佛不二、卽身成佛の道を求めんとて、一方はひたすら身を責めて苦修練行し、一方はあるは到る所の名師に就いて疑義を質し、あるは心を靜めて一代の聖教に眼を曝されたが、月日は空しく雲と、もに推し移り、春秋は徒に水とともに流れ去る、この間我宗祖は、幾たびか天を仰いで嘆かせられた、ア、我、今にして早く不二の妙法を悟るにあらずんば、正法一千年は夙に去り像法一千年も亦已に盡きんとし、將來末法萬年五濁惡世のたゞなかに、哀々たる無邊の衆生は、いかにして六道の苦界を免れ、大悲救濟の筏に遇ふことを得べきぞと、げに十ケ年に渡る大煩悶、大苦惱と、不惜身命の御精進と奮鬪とは、終に感應空しからずして、延曆二十二年、三十歳の御時に至り、その昔善無畏三藏が一時我國へ御渡來ありしも、未だ密教弘通の時機ならずとて、左の豫言の文を記して、大和の國、久米の塔柱の中に留め置き給ひし、「大日經」一部七軸をば御感見あらせられたのである。

「駄都はこれ釋尊の遺身、經王はまた遮那の全體なり。然して小國邊域時機未だ熟せず、仍てこの法をこの地に留めて、將さに機を待ち時を待つ、末葉に必ず弘法利生の菩薩ありて、來つてこの教を世に弘むべし。」

宗祖はこの豫言を視、この經を獲させられて、感激のあまり、幾たびか繰返して御讀み遊ばされた。併しながら「大日經」には、必ず師傳口授に依らねば文義の理解出來ぬ所があるのにも係はらず、當時の我國にはこの經を解する者が、未だ一人も居なかつたのである。こゝに於て宗祖は入唐求法の大志を起し、御師範なる勤操大德に請ひ、桓武天皇に上奏し兼て宗教の盛んなりと噂せらるゝ大唐へ渡つて、この教を求めらるゝことになり、二十三年七月、遣唐大使、藤原葛野麿等とともに、八重の潮路を分けて、肥前の國田の浦を船出せられたのである。

これやこの、唐土船に、乘りを得て
しるしを殘す、松のひともと。

と歌はるゝ、その船路の御困難は、またなか〳〵一方ではなかつた。已に日本の涯を離れて、中途に及ぶ比ほひに、暴き雨帆を穿ち、烈しき風舵を折り、短かき舟はたゞ〳〵浪に從うて昇

沈し、風に任せて南北するのみ、もはや沈没の大難免れがたしと思召されし時に、我宗祖は

「あはれ本朝一百八十七所の、諸く、の神たち在ますや否や、我今この船の中に、最上無比の妙法「大毘盧遮那神變加持經」を載せたり我今にして海波に没しなば、三世の衆生も永く生死海に没しなん。我若し浮ぶことを得ば、一切衆生も亦生死海を出づることを得べし。諸佛若し我誓願の重きを思ひ給はゞ、生佛の海必ず毀損すべからず。」

と、至心に祈願せらるゝと、風波は漸く收まつたが、シカモ尚、水は盡きて人疲れ、海長うして陸遠く、二ヶ月餘りも船中に苦しまれたあげくに、唐土へ着せられたのである。

かくて漸く長安の都に入り、延暦二十四年、乃ち大唐順宗皇帝、永貞元年二月中旬。大興善寺大廣智不空三藏上足の弟子、密宗傳燈第七の祖師内供奉十禪師、惠果阿闍梨に見えまつらんとて、青龍寺梵場に詣でられた、時に阿闍梨一たび宗祖の御顏を御覽あらせらるゝや、限りなき御喜悅の心溢れて莞爾として微笑せられ、宗祖に告げてのたまはく、

「我先より、汝の來ることを知つて、相待つこと久し、來ること、何ぞ遲かりつる、サレド今日相見つること、太だ好し、我報命正に盡きんとするに、法を傳ふるに、未だ其人なかりき須らく香華を辨へて早く灌頂の壇に入るべし。」

との稀有の御言葉であつた。凡そ密教を學ぶにいかに利根の者と雖も、さま〳〵の準備の修行をなさゞれば一界の法をも授けられざるに、これは三千里外異國の一旅僧、初めて見參していまだ師弟の禮をも執らぬに、早く已に此言葉に接し給ひし宗祖は、げに夢中に夢を見る御心地であつた。それより半歲ならずして、八月上旬に至るまでに、三千の弟子衆の中、僅に義明供奉一人のみに授けられし、金剛界、胎藏界兩部の大法をば全く我宗祖に傳授し終られた。阿闍梨は宗祖の受法、漸く其功を奏せるを見そなはされし十一月下旬、一同の弟子衆を集めて、左の遺訓を垂れさせられた。

「夫れ兩部の大法は、如來の肝心、成佛の徑路なり。普く法界に流布して、有情を度脫せんことを願ふ。幸ひに辨弘、惠日には並びに胎藏界の師位を授け、惟上義圓には俱に金剛界の大事を訓へ、義明供奉には兩部の大法を傳へたり。今日本沙門空海、來つて聖教を求むるに兩部の祕奥、壇儀、印契を以てす梵漢違ふことなく、悉く心に受くること、猶し瀉瓶の如し、この沙門はこれ凡人にあらず、内に大乘の心を具へて、外に小國沙門の相を示す、三地

の菩薩なり、夫れ日出づれば月隱れ、油盡きぬれば燈火の消ゆるはものゝ常なり、菩薩も止まらず、如來も亦滅せり、授法茲に已つて、我願ひ足れり、我も亦眞に歸くに如かじ」と。

この御言葉を聽かせられた、我宗祖の御心には、いかばかり偉大なる御自覺が起つたであらうか。已に兩部の大法、祕密灌頂を受け、遍照金剛尊として、法界の大導師たる阿闍梨位に上り、密宗第八番の嫡宗たることを印可せられたるさへあるに、今また親しく此證言を蒙りたるは、抑も何を暗示するとかなす、況んや俄に恩師阿闍梨の入寂に過ひ、限りなき恩德に感泣しその夕は夜もすがら佛前にて、追慕の思ひに耽らるゝ燈火の前に、忽然として師の阿闍梨は現はれたまひ、更に懇切なる御遺訓を垂れさせ給ひけるをや。

「汝未だ知らずや、吾と汝と宿契の深きことを、多生の間相ともに誓願して密藏を弘演す、彼此かはる〴〵師資となること、啻に一兩度のみにあらず、この故に汝が遠涉を勸めて、我深法を授く、受法こゝに終つて吾願足れり、汝は西土にして我足に接す。我亦東生して汝が室に入らん。久しく遲留すること勿れ、吾は先に在つて去るべし。」と

かくて密宗傳燈第八祖として立たせ給ひし我宗祖は、師の阿闍梨の印可とゝもに、從來自ら覆うて居られた、小國沙門の冠りを投げ捨てさせられ、終に二佛中間の大導師として蹶起せられた。

「人法々爾たり、興廢何れの時ぞ、機根、絶々たり、正像何ぞ別たん」末法萬年のたゞなかは云ふも愚や、五十六億七千萬歲の後、龍華三會の曉に、彌勒佛の下生あらせらるゝまでの一切衆生は、否、否、虛空盡き衆生盡き、涅槃盡きんまでは、我攝化の本願は盡きざるぞと本地法身大日如來の、化他の妙用靈動は、こゝに於て遺憾なく發揮せられたのである、見よ釋迦如來の日の光りは消えたりとも、彌勒佛の月の影はさゝずとも、末法の闇夜を照したまふ燈明臺は、赫々として月よりも日よりも明かに輝いて居るではないか。

日は沈み、月は未だ出ぬ、宵のまを、
かゝげて照らせ、のりの燈火

本地法身の化身、二佛中間の大導師なりとの宗祖の大自覺は、實に絶對的の靈動である。かの清涼殿上の卽身成佛も、神泉苑の降雨祈願も、八十八ヶ所の開創も、伊呂波の製作も、國祚萬歲玉體安穩の御祈禱も、高野入定、同行二人の御誓願も、要するにこの大自覺が、斷片的に

顯はれたる、應病興藥に外ならぬのである。

ありがたや、高野の山の、岩かけに、
　大師はいまだにおはしますなる

まことにこの歌の心の如く、宗祖御一代の御攝化の中で、最も偉大なる感化を後世に與へられたのは、その最後の御靈動たる入定留身であつた。乃ち不生不滅の御身を、長へに高野山上千年の老杉萬古の天風に梯づらるゝ處に留めて、末代の弟子を擁護あらせらるゝと云ふことはけに宗祖の御本願を究竟じて成就せらるゝ所以である。このゆゑに人皇第五十四代。仁明天皇承和元年十二月十五日に、宗祖は諸の弟子衆を集めて、左の如き意味のいと懇切なる、御遺告を垂れさせられたのである。

「吾去んじ、天長九年、十一月十二日より、深く穀味を厭うて、專ら坐禪を好む、皆是れ末世の弟子門徒等のためなり。方に今諸の弟子等諦に聽け、吾生期幾ばくもあらず。汝等好く住して、愼んで教法を守れ、吾入滅に擬するは明年三月二十一日寅の刻なり。諸の弟子等悲泣することなかれ、兩部の三寶に歸住せよ自然に吾に代つて眷顧せられん。吾生年六十二夏臘四十一なり、吾初めは思ひき、一百歳に及ぶまで世に住して、教法を守り奉らんと、然れども諸の弟子等を恃んで、いそいで永く卽世に擬す。後生の弟子、吾が顏を見ずと雖も、心有らん者は、必ず恩德の由を知るべし、是れ吾白屍の上に、更に人の勞りを欲するにあらず。密教の壽命を護り繼いで、龍華の三庭に、開かしむべき謀りごとなり。入定の後は、兜率陀天に往生して、彌勒慈尊の御前に侍るべし。五十六億餘の後、必ず慈尊と御共に下生して、吾先跡を問べし。亦且つ未だ下らざる間は、微雲管より見て信否を察すべし。努力努力後を疎かにすることなかれ。」

かゝれば定後一千一百年の今日に及ぶも、日々分身散影して、吾等信者を擁護したまうて居ることは、少しも疑ふべきでない。そはあだかも、

武藏野の、萩の葉ごとに、おく露の
　その玉ごとに、やどる月かけ

の歌のこゝろの通り、幾萬年の後、幾億人の多きに渡るも、大慈の影はつねに行者の心水にうつりて、加持感應の靈用は、決して變ることが無いのである。

「南無大師遍照金剛」

ア、これ實に絶對救濟の御聲である。世上の法律や、教育などは、人を中心より懺悔せしめその罪障を消滅するほどの力がない。法律にて責むれば、人の子は尚更罪を造るやうになる。教育が進めば進むほど世道人心は、日に月に益々微くなる。併しながら我が末代の大導師、大悲の御親である、遍照光明の御德はたとひ世間の法律、道德にて死刑の宣告を受けたるほどの罪業深重なる者にても、一旦至心懺悔して白淨信心を發し、その御袖に縋りさへすれば、必ず其心に無限の平和を與へ、來世の業報を照破して、極樂淨土へ引導せねば止まれぬのである。

生きしにの、川に世を經し、渡し守、
わたしはてずば、棹はおさめじ

生死海に輪廻する、一切衆生の業力の根本を拔き去つて、淨土の彼岸に渡しはてずば、大悲の棹は決しておさめじとの、金剛堅固の御誓願は、未來際を盡して變ることはない。サレバコソ曠世の奇僧、一休禪師も御廟前に詣でゝ、

生身大日覺王尊　出入神通活路門
迦葉持衣長夜泊　秋風春雨月黃昏

と、贊せられたのである。　人世に於ける光明の源泉、暗黑界を照破する最大の力は、けに我高祖の人格、否靈格である。この靈格こそ宇宙に於ける不滅の光明なれ、我宗徒は行住座臥、つねにこの靈格に對して、深き深き感謝の念を捧げねばならぬ。

南無大師遍照金剛！　南無大師遍照金剛！

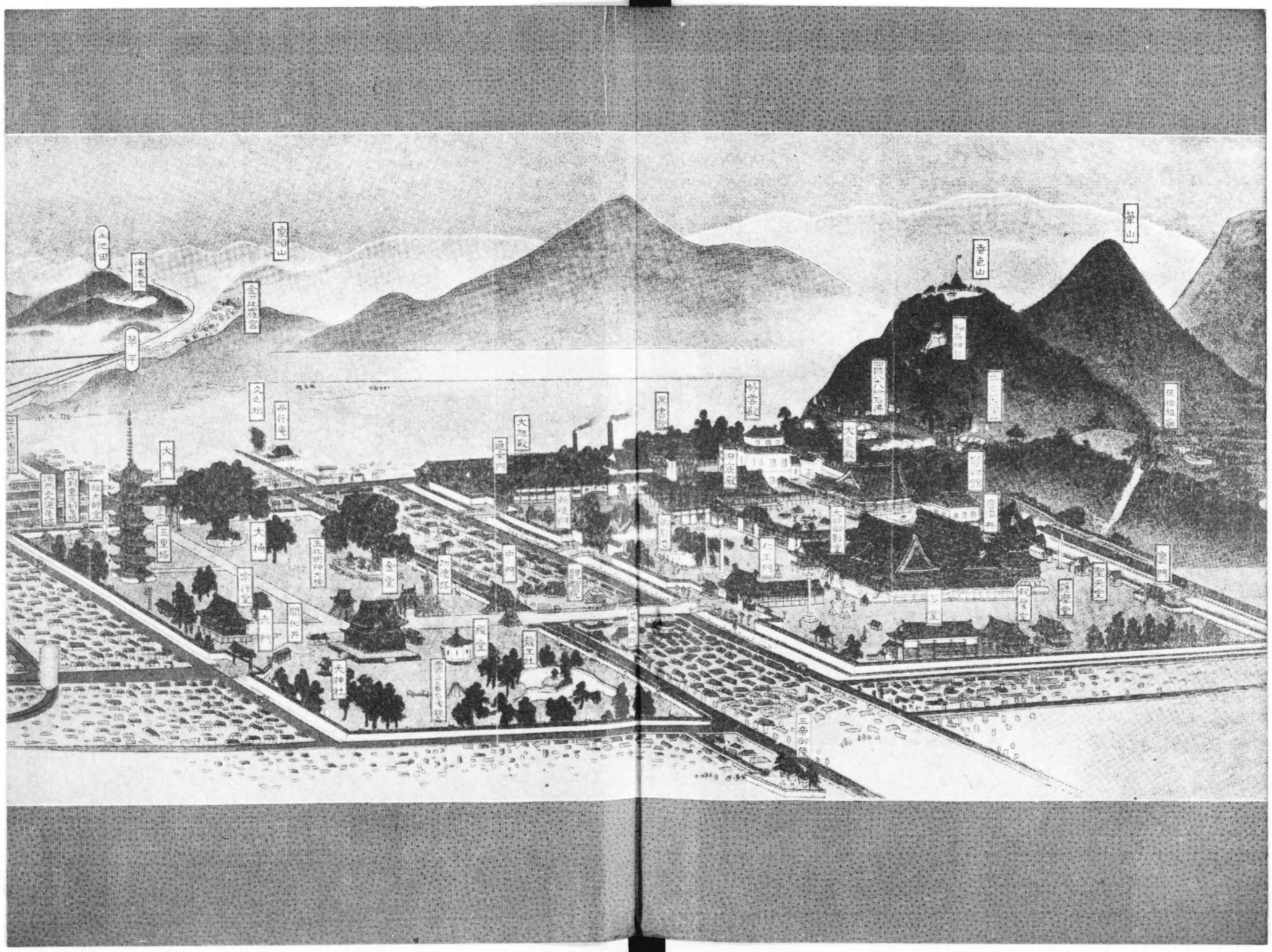
昭和九年五月二十五日印刷
昭和九年六月一日發行

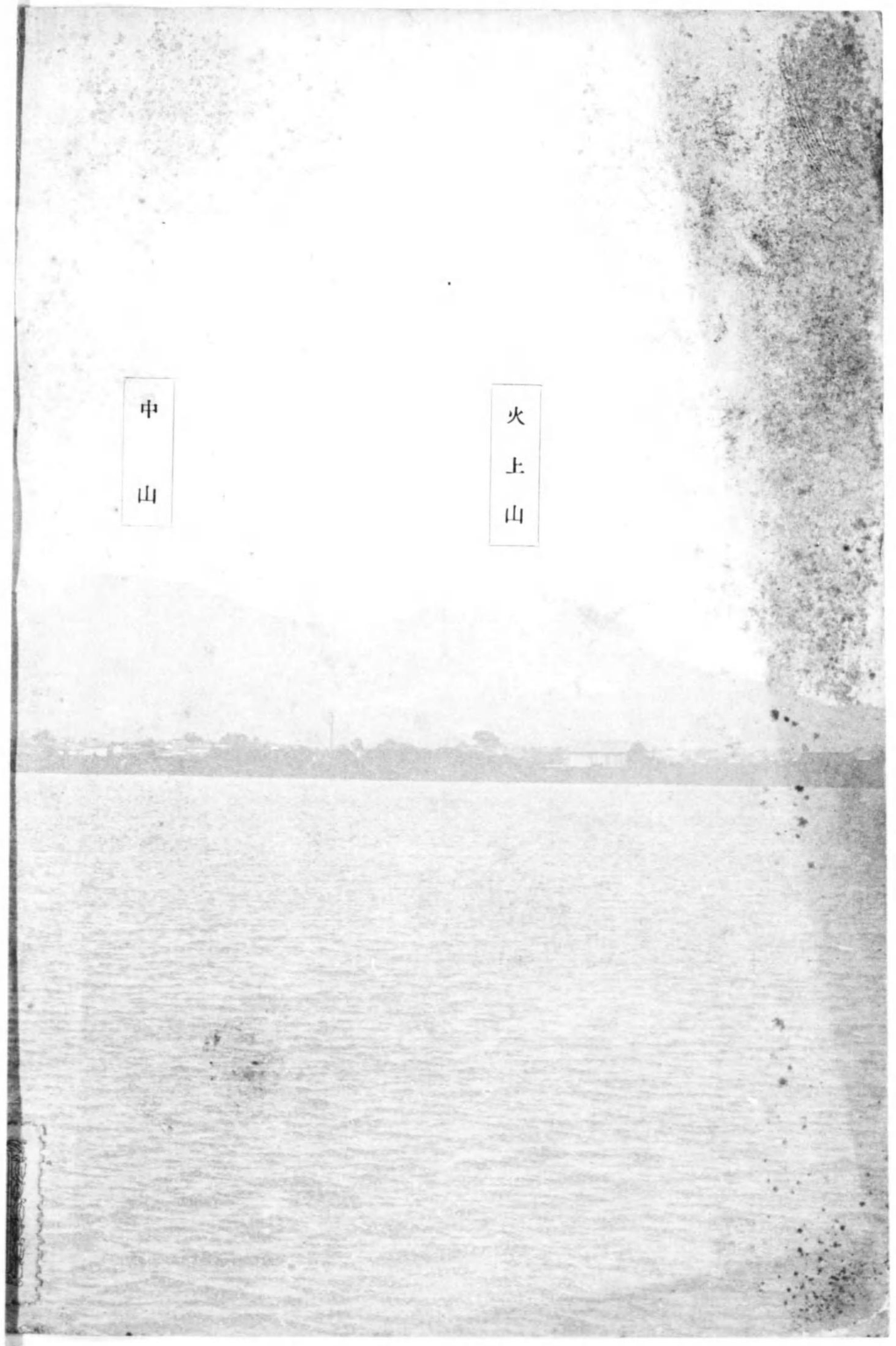
著者　和歌山縣高野山大學　和田性海

發行者　香川縣善通寺町上吉田九一七　龍田宥量

印刷所　京都市下京區西洞院七條東入　內外出版印刷株式會社

發行所　香川縣善通寺町　大本山善通寺　弘法大師御忌奉讃會


上池田
海蔵寺
琴平
宮毘山
金刀比羅宮
久之松
西行堂
大門
三重塔
大楠
五代目神大楠
金堂
中門
大旭殿
通夜堂
開化井
大神社
龍王社
三帝の像
妙雲殿
黒書院
日蔵殿
大客殿
大玄関
仁王門
大堂
聖天堂
鐘楼堂
鐘山
香色山
法伝堂



終